学園黙示録　集いし異世界の旅人達

虚空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園黙示録　集いし異世界の旅人達

【Ｎコード】
Ｎ３５７０Ｎ

【作者名】
虚空

【あらすじ】
ワタシハ・・・・タダアノヒトト・・・・・・

その想いが暴走し・・・・・世界を壊してしまう。

『壊された世界』で生きる人々は、奪い、苦しみ、痛みを堪えながらも生存への道を懸命に選び抜く・・・・・例え、誰かを犠牲にすることとなろうとも・・・・・

だが、そんな世界に『救世主達』が集うことになるの神の采配なのか・・・・・誰も知ることはできない・・・・・

追伸

００ストライカーズのネタバレも含まれますので注意を

P　戦士達の始まり（前書き）

ついに始めてしまいました・・・・・かなり、ヤバイかもしれませんが自分なりの戦いをしてみます。

P　戦士達の始まり

・・・・・・助けて！！

その叫びは、１人の少女からか・・・・・それとも多くの人の叫び・・・・それとも１人の『人間』が望まない未来を選んでしまったからか・・・・・『地球（ホシ）そのもの』の叫びだったのかは、誰にも解らない・・・・・

ただひとつだけ、確かな事は・・・・・その声が『届いたことである』

次元世界　管理第１世界
『ミッドチルダ』
ミッドチルダ中央部
湾岸地区
ミッドチルダ南駐屯地内Ａ７３区画
機動六課
海上訓練シミュレーター

「はい。これで午前中の訓練は、おしまいだよ」
「みんな、よく頑張ったね」
「「「「ありがとうございました！！」」」」
「お疲れ！！」
「・・・・・」

1人の女性、なのはが立ち並ぶフォワードメンバーに訓練の終了を告げる。

その後、それぞれ陸士制服へと着替えをすませ、隊舎へと戻る道を共に進む。

「う～ん！！今回もハードだったね、ティア」
「あんたは、飛ばしすぎてるからでしょうに！！」
「そうかもしれないね。スバルって猪突猛進、どんな壁でも壊して突破だもんね？」
「そうだな、マッハのローラー部の損耗見てたらマッハだから耐えられるからいいが、他のデバイスだったら壊れてるぐらい走り回ってるな」
「うぐっ・・・・・シンヤさん！！」

シンヤの言葉にスバルは、目をウルウルと潤ませる。

「はは、昔のなのはにそっくりだね？」
「はにゃ！？」

共に訓練に参加していたユーノの言葉になのはは、目を丸くする。

「昔のなのはさんみたいって？・・・・・」
「邪魔する子は、容赦しない。言葉を聞かない子も話すために叩き潰す。あと、自分がこれだって決めたことは、無茶をしてでも貫き通すところかな？」
「ユ、ユーノ君！！！！」
「・・・・・誉めてるか、誉めていないのか解らないな」「そうですね」

「はぅぅぅ」

ユーノの言葉に刹那とティアナは、冷静な分析をし、とおの本人は、顔を赤くしたり、青くしている。

「ユーノさんには、形無しですねなのはさん」
「そうだね、それにユーノさんは、防御系が固いからね・・・・・」
「まぁ、人には、1人や2人、頭があがらない奴ぐらいいるさ」
「シンヤの場合は、誰だろうね？」

イタズラっぽく笑いながら問いかける彼女にシンヤは・・・・・

「特にいないと思うが、たまに君の機嫌がご機嫌斜めな時かな・・・・・例えば、朝方に物陰引き込んでキ・・・・」
「シンヤ！！！？」

最近、恋人になったシンヤの言葉にフェイトは、顔を熟したトマトのように赤くし、キャロとエリオは、不思議そうに首をかしげた。

そんなこんなのやり取りをしつつ隊舎へと足を向けようとした。

その時！！

・・・・・・・助けて！！

「！？」
《！！》
《！！》

「？どうした、刹那？」
「セラヴィー？」
《エクシア？》

刹那と刹那のデバイス、エクシアとユーノが預かっているセラヴィーが何かを感じ取ったような反応を示す。

「わからない・・・・・ただ」
「ただ？」
「・・・・・声が」
「声？」
「私達にはなんにも？」
「うん、何も聞こえなかったよ？」

刹那を除いたメンバー全員が首をかしげたその時・・・・・

《我は、行く》
「エクシア？」

自らのデバイスの不可解な声に刹那は、疑問を持つ。

《我は、行く、祈りと》
《叫び、悲鳴、痛みが蠢く》

「おい！エクシア、セラヴィー！？」

デバイスマイスターのシンヤが２つのデバイスが正常でない事に結論が至るとデバイス達をとろうとするが・・・・・

《《『すべてが壊れた世界』へ》》
その言葉が紡がれた瞬間！！
エクシアとセラヴィーは、光を放つ！！
トランザムの赤い輝き、トランザムバーストのような虹色の輝きではない、『真っ白』な輝きが広がる。

「なっ！？」
「えっ、なに」
《どうしたんですか、エクシア、セラヴィー！！》
《リカバリーを起動させろ、セラヴィー！！》
なのはのデバイス、レイジングハートとフェイトのデバイス、バルディッシュがエクシアとセラヴィーに呼び掛けるが、エクシアとセラヴィーの輝きは強まるばかりである。

「いったいどうしちゃったんでしょうか！？」
「わからんが・・・・・エリオ、キャロ」
「「えっ、はい」」
「しっかり手を握ってろ！！」
シンヤは、何かを感覚的に知ったらしくフェイトとエリオ、キャロを抱き締めた。

「キャッ！」
いきなりの事でフェイトが小さな悲鳴をあげるが、シンヤは、気に止めずに刹那達にも注意を促す。
「刹那、ユーノさん！！」

「・・・・・・！！」
「！？・・・・・・わかった！！」

こちらも何かを感じ取った2人もユーノは、近くにいたなのはとスバルの手を掴み、刹那は、ティアナの手を掴む。

「えっ、ユーノ君！？」
「ユーノさん！？」
「ギュッと手を握ってて！！」

「せ、刹那さん！？」
「離れないようにしろ！！」
抱き締めたり、手を掴んだ人物達に注意を飛ばす・・・・・恐らくこれから起こることを予測して・・・・・

《《ｍｏｖｅ（転送）》》

エクシアとセラヴィーから放たれた強烈で真っ白な光が彼らの視界を白く塗りつぶす・・・・そして光が収まる頃には、彼らは、１人残らず消えていた。

世界名称不明
風都
鳴滝探偵事務所

優しさ、苦しみ、悲しみ、笑顔を運ぶ、様々な風が吹く都市、風都。
この街を護る『3人』の仮面を纏いし戦士・・・・『仮面ライダー』、その3人の内、『2人で1人』の仮面ライダー、優しさと冷徹さを持つ男を目指すハーフボイルド探偵左翔太郎、無限の知識を宿す『地球(ホシ)の本棚』へのアクセス権を持つ、神の子フィリップも叫びを聞いた。

「ン？」

無数の本が本棚に入れられ、立ち並ぶ空間、『地球(ホシ)の本棚』で自分がはまり出した事を『検索』していた髪止めを着けた青年、フィリップは何かの視線を感じ、検索する手を止め、振り返った。

するとそこには・・・・・

「・・・・・」
「・・・・・君は？」

小さな女の子が立っていた。

ただ、その少女の姿は、白いワンピース状のボロボロの衣服や前髪で顔が隠れてしまうほど長く白い髪の毛にも返り血と思われる血がついている。

「君は、誰だい？」

フィリップは、その姿を気にも止めずにこの場に現れた少女に問い

かける。

すると少女は、小さく口を開く。

「・・・・・・・・・・・・お願い」

「？」

フィリップは、少女と同じ背となるようにしゃがみこむと少女の前髪を上げさせた。

すると・・・・・・

「！！・・・・・・君」

「・・・・・・助けて！」

少女は、涙を流しながらフィリップに抱きつく。

抱きつかれた瞬間、フィリップの脳裏に何かが流れ込む。

血と死臭が漂う死者達が歩き回り、そのもの達に囲まれ、肉を喰い千切られる生きた人間、そして顔や服を血に汚しながら戦う者達の姿が鮮明に映し出された。

「ハッ！！」

フィリップは、その光景に一瞬、叫びをあげた。

フィリップが汗だくで前を見ると白髪の少女は、居なくなっていた。

・・・・・今のはいったい

意識をいつも自分が1日の大半を過ごすガレージにある自分の肉体へと戻すフィリップ。

だが、その肉体も恐怖感からか汗でビッショリであった。

「ん、どうした。フィリップ？」

事務所へと繋がる扉からフィリップの相棒であり風都を愛する熱い青年、左翔太郎が姿を現し、フィリップの姿に疑問を投げ掛けた。

「・・・・・翔太郎」

「フィリップ？・・・・・何(なん)かあったか？」

相棒の様子が普段と違う事に翔太郎は、不安な顔でフィリップに近づく。

「・・・・・わからない・・・・・わからないけど」

「ん？」

「『依頼』だと思う」

「依頼？誰から」

「それは・・・・・」

先程の事をうまくまとめられないフィリップ・・・・・とガレージ内に黒と金色に塗り分けられた鳥が飛んだ。

「あっ！」

「エクストリーム!?何でここに?」

彼らが変身する二色の仮面ライダー『W』、その最強フォームへの鍵、鳥形ガイアメモリ『エクストリームメモリ』は、普段なら何処かに飛んでいってしまい翔太郎やフィリップの手元にはない。

それが突如、姿を現した。

「何だってこんなところに」

「わからない・・・・・!見て、翔太郎!!」

エクストリームは、ガレージの天井を一回りするように飛ぶとWの大型支援車両『リボルキャリー』の発進口に白い光を照射した。

するとその光は、徐々に空間を歪ませ、エクストリームが白い光の照射を終わる頃には、縁に小さな稲光と霧が渦巻いた真ん中に果てのない闇を抱えた『門』のようなものが現れた。

「なんだよ、これ?」

「次元の歪み・・・・・いや、ワームホール?」

「ワームホールって、SF小説なんかで空間が『ネジ』曲がったりして別の世界につながっちまうっていうあれか?」

「うん。けど・・・・・何で」

フィリップと翔太郎は、目の前で起こっている事に目を奪われ、何が起きているのか理解ができなかった・・・・・が

・・・・・助けて!!

「「！！」」
「翔太郎！」
「ああ、聞こえたぜ！！」

翔太郎とフィリップは、確かにそれを聞いた。

助けを求める声を・・・・・・

「どうするんだい・・・・・・て言う前から決まっているだろうけどね」
「ああ、決まってる・・・・・・行くぜ。フィリップ！！」
「ああ、けど、これだけは覚えておいて翔太郎」
「あん？」

相棒の言葉に翔太郎は、動きを止める。

「僕らは、たぶん違う世界にいくのかもしれない・・・・そこでは、地球の本棚が使えなかったり、ガイアメモリを超える存在があるかもしれないかって言う可能性だよ・・・・・・それでも」
「フィリップ・・・・・俺は、誰かが泣く声や助ける声が聞こえれば、どんな場所だろうと行く。お前は、どうする？『相棒』」

翔太郎の言葉にフィリップは、笑う。

何故なら、決まりきった答えを言うのだから・・・・・・

「もちろん行くさ。これは、僕経由で受けた『依頼』でもあるからね。それに『僕達は、２人で・・・・・・』」「『１人の・・・・・・』

」
「「『仮面ライダーだ』」」
２人は、共に同じ事をいい、依頼に向かう事を決意する。
「じゃあ、行くか」
「ああ、そうだね。相棒」
２人は、自分達の支援ツールである『ガジェット』をすべて持つと、大型支援車両『リボルキャリー』を起動させる。
ガレージの足場が開き、開かれていた装甲が閉じ、各部を変形、及び結合させ、１つの大型車両となる。
２人は、それに乗り込むとリボルギャリーを発進させ『門』に飛び込んだ。
その後を追うようにエクストリームメモリと恐竜型自立ガジェット『ファング』が『門』に飛びこむ。
そして『門』は、静かに門を閉めた。
自らの役目を終えたかのように・・・・・
???
木々や蔦が生い茂る中、一軒の家がその蔦や苔に被われている。
その中に一組の男女がいた。
彼らの服装は、どちらも暗く世界の裏側で動くエージェントを思い

興されるような服装である。

「本当にいいんだね？」

「ああ」

「皆が、戻ってきた時に会えないかもしれないんだよ？」

「わかってる」

「また・・・・・『あの時』のようになっちゃうかもしれないから・・・・・やっぱり、私だけ・・・・・・・・」

「・・・・・空」

男が空と呼ぶ女の肩に手をかける。

肩に手をかけると空は、ビクリと体を震わせた。

「空、抱え込むな」

「でも！！」

「こんな事になるなんて『ヤツ』にも予想できなかったはずだ」

「それでも私は、『彼の一部』だったんだよ！！私が停めなきゃ・・・・・そうじゃなきゃ・・・・・・」

「・・・・・空」

男は、空を抱き締める。

「こ、甲」

抱き締められた空は、男・・・・・甲の行動に目を白黒させた。

「俺達は、ようやく触れ合うことが出来た・・・・・色んな事があって、お互いに手が届かないところまで引き離されたりした」

「・・・・・」

空は、甲の言葉を静かに聞く。

「そんで俺は、そうしなきゃいけなかったとは言え、お前を『殺しかけた』」

「でもそれは・・・・・」

「理由がどうあれ、俺は、お前に・・・・もう苦しんで欲しくない・・・だから俺も行く。今度こそ『ケリ』を着けるためにも」

「・・・・・甲」

空は、甲の言葉に『泣い』てしまう。

何故ならまた、彼は、自分を助けてくれようとしているからである・・・・1人で戦っていた自分を

抱き締める甲は、空が泣き止むまでずっと抱き締め続けた。

「・・・・・じゃあ、行くか」

「ええ」

彼女が泣き止むと彼らは、旅立ちを口にする。「イヴ、転送を頼む」

甲がある一点を見つめ、そう口にすると・・・・・

『わかりました。空間に干渉、次元湾曲率、規定数値に到達・・・・・あなた方の無事を祈ります』

「ありがとう・・・・・イヴ」

「イヴ・・・・・行ってきます」

光が発生したかと思うと彼らは、消え去る。

すべてが壊れてしまった『世界』に希望の『種』達が集結する。

P　戦士達の始まり（後書き）

？？？の世界を知りたい人は、出てきた人物達の名を入れて検索してみてください。

1　状況と動き出す者達（前書き）

虚空「・・・・・書き始めたら止まらなかった・・・・・ガックシ」
シンヤ「作者あぁぁぁ」
？？？「バカばかりね」
ユーノ「あはははは」

1　状況と動き出す者達

壊れた世界

何が世界を変えたきっかけなのだろう？

僕らは、それすら理解できぬまま、生きる道を必死に探す・・・・・

滅びが始まったこの世界で・・・・・

Ｓｉｄｅ　？？？

バリゲードに『奴ら』がどんどんとぶつかってくる。

僕は、手に持った筒をバリゲードの先にいる『奴ら』に向け、彼女からの合図を待つ。

「用意はいいか？」

「いいわ！」

「まわせ！！」

彼女がバルブを回した瞬間、筒から水が強烈な勢いで出される。

水の勢いに負け、筒先を上に無理矢理向けてしまう。

「孝！！」

幼馴染みで一緒に学校の屋上まで逃げてきた宮本儷が、声をあげる。

彼女の制服も『奴ら』となってしまった友の血で汚れている。

「だ、大丈夫だ」

孝と呼ばれた、小室孝は、何とか筒・・・・・消火栓を力付くで抑え込むと・・・・・

「お前らは、いいよな・・・・・あーうー楽しそうに言いやがって・・・・・」

だけど、激痛の中で死んだ肉体は・・・・・何かに捕らわれたように俺達に襲いかかる。

ここまで来るまでに『奴ら』となった同じ学校の生徒を倒してきたが、先程、『奴ら』になる前に自分を殺してくれと頼み、結局、『奴ら』になってから倒してしまった『友』を倒した感触がまだこの腕に残る・・・・・が、今は、生きるために・・・・・

「喰らえ!!」

消火栓から飛び出た放水が、バリゲードごと『奴ら』を吹き飛ばす。

Ｓｉｄｅ　なのは

「ここは?」

「どこかの学校のようだね・・・・・何かあったらしい」

「何かって・・・・・ウッ!」

「スバル・・・・?・・・・・・!!」

光が収まるとなのは達は、どこかの学校の校庭の片隅にいた。

ユーノが何かを受け止めたかのように静かに状況を口にする。

それと同時にスバルは、何かを見て口許を手で覆い、何かを堪えようとする。

スバルの様子になのはがスバルの視界の先に目を向けると・・・・・・そこには・・・・・・

「ギャアアア！！」

「た、たすけて・・・・・・アアア！！」

「ウラァ！！やっ・・・・・・・・があ！！！！」

生を感じない肌の色が黒ずんだ者達が血の惨劇を作り出し、逃げ惑うこの学校の生徒・・・・・・そして、戦う者の姿がある。

「な、何が起きて・・・・・・」

「なのは！！」

《スフィア・フィールド》

なのはが目の前の光景を理解できぬまま呟こうとした時、ユーノの叫びが上がり、ユーノの防御魔法が展開される。

その瞬間、肌が黒ずんだ者達が防御魔法にぶち当たる。

見えない壁を叩くように防御魔法に何度もぶつかる。

中には、眼球が飛び出たり、腕が引きちぎれた者もいる。

「・・・・・ウップ！！」

この光景にスバルは、とうとう胃の中のものを吐き出してしまう。

「スバル！！」

なのはは、慌ててスバルの背を擦ってやる。

なのは自身も光景に精神を蝕まれていないわけではない、自身の経験と投入されたある『戦場』、さらにはスバルとティアナの分隊であるスター分隊の隊長だから折れるわけには、いかなかった。

「クッ、セラヴィー！！」

《スフィア・フィールド・アサルトモード》

ユーノが叫びをあげるとフィールドが光と共に爆発を起こし、黒ずんだ肌の者達を吹き飛ばす。

Ｓｉｄｅ　エリオ

「ここは？」

「・・・・・学校の工作室みたいだな」

「そうみたいだね」

「工作室？」

「キュルァ？」

光が収まって場所を確認するとエリオ達は、どこかの学校の工作室らしきところに跳ばされていた。

「・・・・・！！こいつは・・・・・」

一番最初に窓から外を見たシンヤが、目を見開かせて外を見いる。

「どうした・・・・・！！」

シンヤの言葉にフェイトも外を見ると口許に手を当てて言葉を失ってしまう。

「フェイトさん、シンヤさん？」
「いったい何が」
「キュア？」
「・・・・・！！エリオ達は、見ちゃだめ！！」

外を覗こうとしたエリオ達を押し止めようとするフェイトだが・・・・・

「・・・・・いや、見せといた方がいい」
「でも！！」
「こんな状況だ・・・・・いずれ見ちまう・・・・・それに学校の外も同じような状況だろう・・・・・だから」
「・・・・・わかった」

シンヤの言葉に説得されたフェイトは、エリオ達を止めるのをやめた。

エリオ達が窓を見たその先には・・・・・

ウッ！！

エリオは、胃が引っくり返る感覚を覚えた。

なのは達よりも校庭全域を見渡せたため、『惨劇』をさらに広く見てしまう。

「こ・・・・・こんな・・」

あまりの光景にキャロが気を失う。

「キャロ！？」

「無理もない・・・・・・」

フェイトが悲鳴をあげ、シンヤがキャロを抱き止める。

キャロを抱き止めるシンヤの表情は、固い。

そして、エリオは・・・・・・

「！！！！」

「待て、エリオ！！」

窓を開け、飛び出そうとするエリオの手をシンヤが掴み、引き留めた。

「は、離してください。シンヤさん！！出なきゃ皆が！！」

「わかってる！！だが、俺達が動いたからといって何かが解決するわけじゃない！！！！！むしろ、俺達の『力』がこの原因の根源にされて叩かれる！！！！！！！！」

「何を根拠・・・・・・！！」

エリオは、振り払ってでもいこうとしたが、シンヤに握られた手は、痛いほど握られ、シンヤも唇から血が滲むほど噛み締めている。

「がむしゃらに行って、お前が死んだらキャロも悲しむ・・・・・・だから今は、『堪えろ』」

シンヤは、あくまでも冷静な目をしてエリオを押し止めるが、唇から流れ出る血とキャロを抱く腕の震えから自身が真っ先に飛び出したいのを押さえていることにエリオは、気づく。

「・・・・・わかりました」

エリオは、窓を閉め、キャロの介護をシンヤと変わる。

「・・・・・ありがとう。・・・・・ストレイド」

シンヤは、エリオにキャロを渡すと待機形態である自らのデバイス、ストレイドに声をかける。

《はい》

「偽装モードでデバイスのみを展開」

《了解》

シンヤの言葉に従い、ストレイドが拳銃のような形となり、シンヤの両手に二丁握られる。

ただし、エリオ達が見慣れているストレイドの形ではなく、エリオも訓練学校の教本等で見たことがあるオートマチックタイプの黒光りする拳銃である。

偽装モードとは、シンヤが独自のアイディアで造り出し、エリオ達のデバイスにも試験運用をかねて組み込まれている形態である。

主に魔法等の概念がない世界（例えば、科学文明が栄えている世界

等）でその世界の住民の前でデバイスを使う事態に陥った場合に使用する。

外見上は、自分達が持つデバイスに基となった武器の形となる。

ちなみに刹那のデバイス、エクシアは、２本のＧＮブレード？が木刀へ、ティアナのデバイス、クロスミラージュが拳銃へと形を変える。

「・・・・・遊び感覚で作ったモードを使う日が来るなんてな・・・本当にやな奴だよ『俺』は！！」

シンヤの口調は、自己嫌悪するものであるが、いつもエリオ達に接するよな軽々しい空気は、醸し出してはいなくむしろ、戦闘中に醸し出す空気を纏っている。

《マスター、自己嫌悪は、事態が収拾してからでも・・・！！熱源、扉の前にいます》

「！！」

フェイト、エリオ、隠れろ！！

シンヤが自己嫌悪に陥ろうとしたその時、ストレイドの警告がとぶ。

瞬時にシンヤの目が鋭いものとなり、念話でエリオ達に指示をとばすと扉の影へと隠れる。

エリオ達も頷いて返事を返すと身近な机の影にフェイトに背中から抱き締めて貰いながらもしゃがみこんで隠れる。

そして、扉が開けられる。
引き戸の影から1人の引き戸の影に隠れるように顔を出し、中を確認する眼鏡をかけた人の姿が一瞬だけエリオ達のところから見えた。
顔を引っ込め外にいる人に何かを伝えようとしたところでその人が扉で死角となっていたところからシンヤが一気に躍り出た。

「誰もいませんよ。高ぎ・・・・・ヒッ！」
「イッ！！」

扉の向こうでシンヤにストレイドを向けられた2人の人間が息を飲むのエリオ達は、聞いた。

Ｓｉｄｅ　？？？2

校内放送で他の生徒が正面玄関を目指し、我よ先にと駆けていった中を抜け出し、小太りぎみで眼鏡をかけた男子生徒、平野コータは、髪をツインテールでまとめている同学年の女子生徒、高城沙耶に捕まって（？）工作室前に来ていた。

そして引き戸を少しだけ開けて、とあるところから習った『銃弾が飛び交う中で相手を見るため』のように少しだけ顔を出し、中を確認する。

よし、誰もいない

顔を引っ込め、隣に立っている沙耶にコータは、声をかけようと口を・・・・・

「誰もいませんよ。高ぎ・・・・・ヒッ！」

コータが見えなかった引き戸の影から1人の男が躍り出て、黒光りするものを突き付けられる。

それがオートマチックタイプの拳銃であると認識する前に・・・・・・沙耶の方にも・・・・・

「イッ！！」

躊躇なく拳銃が向けられたようだ。

コータは、相手の顔を見る。

相手は、自分達と同じような東洋人ぽい顔だちが瞳の色がやや暗いが青い瞳である・・・・つまり、外人の可能性大。

拳銃を向けられた時の殺気は、恐ろしいものであり、コータ達は、最初の短く小さな悲鳴から何も喋れなかった。

殺られる！！

コータは、そう思っていただが・・・・・

エッ？

コータ達をただの高校生と認知したのだろうか、男は、両手に持つ拳銃をただあてもなく廊下を徘徊する『奴ら』に向けた。

そして目の鋭さは、解かないまま、首を扉へと振り、工作室（又は、美術室と繋がっているので美術室とも呼ぶ）の中に『入れ』と合図を送っている。

コータと沙耶は、呆気にとられつつも静かに頷き中へと入った。

そして、男も拳銃を『奴ら』に向けつつもじりじりと後退して中に入ると構えを解き、引き戸を静かに閉めた。

「・・・・・フゥ」

扉を閉めてから数秒後、男から殺気が消え、息を漏らした。

コータと沙耶は、男の背に恐る恐る声をかける。

「あの～」

「あんたいきな・・・・・」

沙耶の方が大きな声を出そうとしていたからか振り返った男、正確には彼と呼んでいいぐらいの若さの男の手で口を押さえられた。

拳銃を素早く制服（どこの学校のものかわからないが）のズボンのポケットに突っ込んだらしく、空いた手で沙耶の口を押さえつつもう片方の空いた手で人差し指を口の前に立て、静かにするように指示をとばすと次に工作室の奥を指差して、そっちに移動するように指示を出している。

コータは、頷き、沙耶は大きな声を出そうとしたから警戒され口を手で押さえられながらも工作室の半ばまで移動した。

半ばまで来ると沙耶の口から手が離された。

「ケッホ・・・・・あんたいきなり何よ」

口から手がなくなった事で遠慮なく彼に噛みつく沙耶。

ただ、声はさっきので懲りたのか小さな声で話している。

「まぁ、まぁまぁ、高城さん。この人が助ける気がないなら俺達、拳銃向けられた時点で殺されてましたよ？」

「あんたは、黙っていなさい」

コータの正論は、沙耶の一撃のもと両断された。

とそこで、彼の口が開かれた。

「おいおい、いきなり喧嘩は、止してくれよ」

そう言う表情は、優しげなものであった。

「誰のせいでこうなったのよ」

彼の言葉にジロリと睨みつつも沙耶は、原因を突き出す。

と彼は、表情を変えないまま・・・・・

「・・・・・此方もこんな状況で警戒していた」

「あぅ」

「・・・・・」

一切の反論が出来ない言葉を突きつけられた。

そうだ、こんな映画みたいに『死者の体が動き回り、生者(せいじゃ)を喰らう』等誰も理解できないだろう・・・・・理解できないのであれば、警戒して当たり前だ。

「・・・・・と、流石にさっきのはさっきのやり過ぎた。すまなかった」

「あ、いえ・・・・・」

「今度から気を付けなさい」

「はは・・・・・俺の名は、シンヤだ」

沙耶の言葉に少しだけ頬をかきながら名を明かしてくれた。

彼の名は、シンヤと言うらしい。

ならこちらも・・・・・

「俺、平野コータっていいます」

「高城沙耶よ、覚えておきなさい」

自己紹介をした。

「よろしく」

「あの、シンヤさん・・・・・」

「あんた、どこの学校よ?それに街は・・・・・」

「詳しい話しは、後でだ・・・・・出てきてもいいぞ」

一気に質問しようとコータと沙耶は、同時に口を開いたが・・・・・

その前に彼、シンヤが教卓の方に声をかけた。

するとそこから、自分達と同じぐらいの年齢だろうか長い金髪が美しいシンヤと同じ制服を来た女性と女性の腰ぐらいの背の赤髪の男の子とその赤髪の男の子に寄りかかって気を失っている浅い桜色の女の子、何故かその手には、ぬいぐるみと思うにはリアルなちびっこ白竜が抱かれていた。

コータは、彼女らが出てきた時、キッと沙耶から睨まれた。

何故なら・・・・・誰もいないと思ったら４人も人がいたからだ。

シンヤが居なかったら蹴り殺されたかもしれないとコータは、内心、冷や汗をかいていた。

Ｓｉｄｅ　シンヤ

フリード・・・・・ごめん

シンヤは、キャロに抱かれ、必死にぬいぐるみを演じている竜騎フリードを心の底から敬う。

よし、これから俺が話すからうまく話を合わせてくれ

わかった

はい

コータと沙耶にバレない方法である念話で口裏を合わせるようにフェイト達にシンヤは、指示を出していた。

ちなみにその間のコータと沙耶はと言うと・・・・・・

「あははは・・・・・４人もいたんですか」

「な、なんで見るからに外人ぽいのが４人もうちの学校にいるのよ！しかも１人は、二丁拳銃を持ってるし！！！」

こちらの心中を察する暇もなくただ、事実に驚いている。

「正確には、９人なんだがな」

「はぁ！？残りは、何処よ！！」

「さぁ、この学校の裏門みたいな所まで一緒だったんだが・・・・・この騒ぎでバラバラに、結局、この４人でこの教室に逃げ込んだんだ」

ストレイド、なのはさんや刹那、ユーノさん、ティアナ、スバルの魔力反応は？

確認・・・・・完了、反応ありですマスター

良かった。位置は？

正確には、確認できていませんが・・・・・高町一尉、スバル、スクライア司書長は、校庭内に、刹那、ティアナは、学校外にいるようです

わかった。ストレイド、各デバイスとのデータリンクとここでの会話を念話通信で流せ

了解

シンヤは、念話でストレイドとやり取りを行いながら話を続けた。

「逃げてきたって、外から!?街の様子はどうだったの!!」

外から逃げて来たことにすると沙耶が食い付いてきた。

ストレイド・・・・・刹那に

了解、通信繋げます

一瞬の間を置いて、刹那との通信が繋がった。

刹那

シンヤか

刹那の念話は、少し切迫感を抱いていた。

刹那、此方は、無事だ。そっちの状況は?

・・・・・今、藤美学園と言った学校の正門をこじ開けて、ティアナと偽装モードのデバイスで『化け物』と交戦中だ

そうか・・・・・恐らくお前のことだから見てわかっているだろうが『噛まれらダメらしい』

わかっている・・・・・ティアナは射撃で、俺は『木刀』で交戦している

そうか・・・・・・そっちから街の様子は見たか？

・・・・・ああ、見た・・・・察してくれ・・・・・

刹那の念話が固くななものとなっている。

そうか・・・・・・ならひどい有り様になっていると言ってもいいな

ああ・・・・・シンヤ、この『化け物』達は、音に敏感らしい。俺達がたてた音でこちらに群がっている

・・・・・群がっているって・・・刹那、『奴ら』と近接戦やる時に気を付けろよ、『奴ら』、筋肉のリミッターが外れたみたいで、かなりの腕力を持っているらしく、捕まったら逃げられない

シンヤは、窓から見た光景から冷静に情報を引き出していた。

了解、それから『化け・・・いや、奴ら』は、頭を潰せば活動を停止するらしい・・・・そちらでも戦うときは・・・・・

了解だ、ユーノさん、なのはさん、スバル、フェイト、エリオ、聞いたな

うん

聞いたよ

・・・・・はい

うん

はい

それぞれの返事が返ってくる。

よし

「街は・・・・・酷い有り様だった」
「酷い有り様だったって何よ・・・・・もっと具体的に」
「今は、これだけ言っておく・・・・・実際に見た方がいいからな・・・・・」
「なっ・・・・・わかったわ」
シンヤの言葉を察したのか、沙耶は、それ以上、追求しなかった。

「助かる・・・・・あっ、そうだ、自己紹介でもしよう」
シンヤは、空気を変えるかのように話題を変えた。

「うん、そうだね」
「に、日本語？」

フェイトの日本語の相づちに沙耶は、驚いた表情を浮かべている。

「ごめんね。驚かせて、私達は、日本の学校に通ってるから・・・・・私は、フェイト・T・ハラオン」
「エリオ・モンディアルです。こっちは、キャロ・ル・ルシエ」

フェイト達は、コータ達に自己紹介をした。

「そうですか。あっ、俺、平野コータです」
「高城沙耶よ・・・・ところであんたらどこの学校よ？」
沙耶がすぐに聞いてくる。
「俺達は、実星（みぼし）学園て言う。こっちの地方じゃないほうの学校だ。こっちには、修学旅行で来ていた」

シンヤは、切り返しでデタラメな設定で話を進めた。
「ふぅ～ん？でも、見るからに小学生の『ガキンチョ』みたいなのが紛れてるのは、何？」

エリオ達の事を言っているらしい・・・・・・

これに対して、フェイトが答える。

「私達の学校では、修学旅行中、課題があるの・・・・・小学生の子と『うまく接する方法』を会得するって言う課題がね。それで、私とシンヤが担当になったのは、キャロとエリオだったの」
「聞いた事のない・・・・・課題ね」
「まぁ、うちの校長、ある種、変わり種だから」
「・・・・・ですね」

沙耶の言葉にシンヤとエリオは、適当に答える。

ネット等で調べられたら一発で終わりなものの今は、嘘も方便だとシンヤは、自分に言い聞かせた。

「フェイトさんか・・・・・」
「・・・・・コータ」

コータがフェイトに色目を向けている。

それに気づいたシンヤは、静かにコータの肩を叩くと・・・・・・・・・・・

「手ぇ、出したら手足縛り付けて、『奴ら』の前に転がして『あ・げ・る・よ』」

笑顔のまま、恐ろしいお仕置きを口にする。

それに対してコータは、・・・・・色素が抜けていた。

「・・・・・バカオタク」

Ｓｉｄｅ　刹那

シンヤとの話し合いの少し前・・・・・

「・・・・・ここは」

「日本の学校・・・でしょうか？」

光が収まる頃には、刹那達は、藤美学園と言う学校の正門前にいた。

「うん？・・・・・刹那さん！！あれ！！」

「どうした・・・・・！！」

ティアナの言葉に刹那は、振り返り、ティアナの視線の先を追う。

視線の先には、幾つもの黒煙があがっている。

「・・・・・行くぞ」
「はい！！」
刹那達は、桜並木の坂道を駆け下がり、桜並木がきれるところまで行く。
桜並木が切れるとそこには・・・・・・
「！！」
「こ、これは！？」
幾つもの火の手があがり、街からは、悲鳴や銃声が所々から上がっている。
「刹那さん、これはいったい！？」
「わからない・・・・・だが、何かが起こっていることは確実だ」
目の前の光景を冷静に受け止める刹那。
ティアナは、なれていないらしくショックを受けている。
そんな2人に・・・・・
「ギャアアア！！」
「！！」
「！？」
先ほどの学園前から、悲鳴が聞こえてきた。
「刹那さん！！」

「わかっている。エクシア！！」
《《了解。展開モード、偽装モードで展開》》
刹那の手に大小の『木刀』が展開される。
ティアナの手には、『拳銃』が握られる。
シンヤが、オマケと題して製作した偽装モードが展開されたと言うことは、自分達の力が変な誤解を生みかねない事態だと刹那は、自然と理解していた。
「偽装モード？何で！？」
《ストレイド、セラヴィー及び、各デバイスとのデータリンクでノーマルモードでの展開が危険だと判断しました》
「えっ」
「何？」
《映像、送ります》
刹那達の頭に各デバイスから送られた映像が再生された。
その『惨劇』の映像に・・・・
「グッ！」
「・・・・・ウッ！」
刹那達は、胃が引き締まる。
「・・・・・どうやら最悪な事態らしいな」
「・・・・・そうみたいですね」

刹那達は、あらゆるものを堪えつつも駆け出した。
誰かを・・・・・1人でも救うために・・・・・
藤美学園の校門に辿り着くと、校門が開かれない事で数人の生徒が出られないでいた。
「た、助けて!?」
その後ろから黒ずんだ肌の者達が人々を喰らいつつも校門に近づきつつある。
「待ってろ!!」
刹那は、太刀に相手には見えないように魔力を纏わせ、一撃で校門の両開きである鉄格子を真ん中から切り裂く。
「早く行け!!」
「ありがとう!!」
刹那は、すぐに外に逃げるように生徒に指示を出し、外に出す。
「刹那さん、こいつら!!」
先に黒ずんだ肌の者達に出力を抑え、よく見なければただの『ＢＢ弾』のように見えてしまう程の大きさの魔力弾を連続して撃ち込んでいる。
だが、黒ずんだ肌の者達・・・・・『化け物』達は、手足を吹き飛ばされたり、胸部の左側、人間の心臓がある部分を撃たれても平気

な様子でこちらに向かってくる。

「チィ、任せろ！！」

刹那は、ティアナの援護を受けながらも突撃を掛ける。

心臓がウィークポイントではない？

なら！

「ハァ！！」

右手の太刀で『化け物』の一体の『頭』を叩き潰し、左手の小太刀でもう一体の『頭』を貫く。

すると『化け物』は、その動きを止め、糸が切れた操り人形のように地面に崩れ去る。

「刹那さん！！」

「『頭』だ！！『頭』を叩け！！」

刹那は、次々に『化け物』達の頭を叩き潰しながらティアナに叫ぶ。

「わかりました！！撃ち抜け！！」

ティアナも化け物達の『頭』を撃ち抜いていく。

こうして、数分すればすべてを駆逐できると思ったが・・・・・時間がたつにつれ、『化け物』達が刹那達の方に集まってくる。

「クッ！」

流石の数に刹那は、声を漏らしてしまう。

こいつら・・・・・目は、見えていないはずなのに何故・・・・・

まさか！！

刹那は、一度下がると手ごろな石を拾い、校舎の窓ガラス目掛けて投げ込んだ。

窓ガラスは、見事に割れ、派手な音をたてた！！

すると化け物達は、　音のした方に集まり出す。

・・・・・やはりか

何をやったんですか？

ティアナが移動していく化け物達の背を睨みながらも刹那に念話を送ってきた。

『音』だ

『音』？

そうだ、『化け物』達は、視覚ではなく、音によって目標を認識していたらしい

！！だから私達の方ばかり！？

ああ・・・・・そうなる

念話を切り、刹那が静かにティアナの隣に移動する。

と・・・・・

ストレイドから全デバイスに向けての念話通信です

「何？繋げ」

了解

ストレイドからの通信が開かれるとシンヤがここの生徒を保護して色々と話を聞いたことを流している。

そして・・・・・

マイスターシンヤからマイスター刹那へコールです。

繋げ

先ほどの会話へと繋がる。

それじゃ・・・・・どこで落ち合う？

そうだな・・・・・！！シンヤ、緊急事態だ切る！！

「ティアナ！！」

「はい！」

刹那達は、走る・・・・・何故なら白衣を着た女性がいる一階教室に『奴ら』が群れとなって向かっていたからだ。

Ｓｉｄｅ　翔太郎

「どうやら着いたみたいだな？」

「そうらしいね？」

光の『門』を抜け、翔太郎が乗るリボルキャリーは、何処かの山中

にいた。

「しかし、これは！？」

「ああ、当たって欲しくない予想が当たってしまったみたいだ」

リボルキャリーから降りた翔太郎達が見たのは、燃えゆく街、銃声と悲鳴がこの山中にまで聞こえてくる光景である。

「何が起きて・・・・・」

「助けてくれ！！」

「翔太郎！？」

山中の森林から1人の男が腕を喰いちぎられたまま、翔太郎達の下に現れる。

その後ろから黒ずんだ肌の者達が、ユラリユラリと動きながら追ってきた。

「死体が、死体が動いてる・・・・興味深い」

「バカ、そんなこと言ってる場合か！！」

《Ｓｔａｇ》

相棒の悪い『癖』を叱りつつも翔太郎は、ガジェットの1つである『スタッグフォン』にギジメモリを挿入し、手から投げた。

すると携帯電話がクワガタムシに変形し、奴らに向かい、頭部を切り裂きながら飛ぶ。

「おい、大丈夫か！？」

「翔太郎・・・・・もうダメみたいだ」

フィリップが腕を無くした人物を抱き上げたが、すでに息を引き取っていた。

「・・・・・そう・・・・・・！！フィリップ！！離れろ！」

「翔太・・・・・・！？」

翔太郎の警告がとぶが、フィリップは、すでに腕の中の死んだ人間に手を掴まれ、首を・・・・・・噛まれなかった。

何故なら・・・・・・

『ギュアォォォン』

フィリップの護衛、及び、仮面ライダーWのフォームの1つである『ファングジョーカー』の鍵、自律型ガジェットであり、その体に『牙の記憶』を宿す『Ｆａｎｇ』がフィリップを襲おうとしていた奴の頭を切り裂き、事なきを得た。

「何なんだよ・・・・・何なんだよこれは！！！！」

翔太郎は、理解できないまま叫びをあげる。

「翔太郎！！いくよ！！」

「ああ！！！！」

いつも冷静なフィリップもさすがにこれは、答えたらしく、翔太郎に呼び掛ける。

翔太郎もやるせない怒りを抱きながらもWへの変身アイテムである

『ダブルドライバー』を腰に装着する。

するとフィリップの方にも『ダブルドライバー』が具現化した。

そしてフィリップは、左手に緑色のＵＳＢメモリのようなもの・・・・・・『風の記憶』を宿したガイアメモリ『サイクロンメモリ』、翔太郎は、右手で紫色のＵＳＢメモリのようなもの・・・『切り札の記憶』を宿したガイアメモリ『ジョーカーメモリ』をそれぞれ、起動させた。

《Ｃｙｃｌｏｎｅ！！》

《Ｊｏｋｅｒ！！》

起動音が響く中、２人は、ガイアメモリを持つ腕を構え、２人で『Ｗ』の字を描き、叫ぶ。

「「変身！！！！」」

フィリップのダブルドライバーの右スロットにサイクロンメモリが挿入されるとそのメモリは、淡い緑色の光を放ちながら翔太郎のダブルドライバーの右スロットに転送される。

そのサイクロンメモリを右手で押し込み、挿入。

さらに自身の手に持つ、ジョーカーメモリを左スロットに挿入し、ドライバーを開く。

《Ｃｙｃｌｏｎｅ！！／Ｊｏｋｅｒ！！》

開いたと同時にフィリップが糸の切れたように倒れ、起動音が鳴り

響き、２つのガイアメモリの頭文字、『C』と『J』がぶつかり合い、翔太郎の体を包むように緑と紫の風が巻き起こる。

風が収まる頃には・・・・・右が緑、左側が黒い姿をした『戦士』が右側から流れ出るマフラーをたびかせてその姿を現していた。

そう・・・・・『彼ら』こそ風都を守り、今ここに『救いのため』に呼ばれた仮面ライダー『W』が姿を現す。

「誰がこんなことをしたのか、わからないが・・・・・」『今の僕らは・・・・・』

「『罪を裁く、仮面ライダーだ！！』」

Wは、今でも増えつつある『奴ら』に向かっていく。

彼らは、何も理解できぬまま戦いへと赴く。

生きるために・・・・・

1　状況と動き出す者達（後書き）

作品別クロスオーバー時期
学園黙示録
ＡＣＴ．２より

リリカルなのは００ストライカーズ
・・・・・作成進行に遅れあり
ベースをリリカルなのはストライカーズとしているので本編、ティアナとの和解から休日の間に巻き込まれた事にしています。

仮面ライダーＷ
３７話～３８話の間
照井さんが井坂さんを倒した
？？？

本編終了後、数ヵ月・・・・・いや数万年後からスタート。
てな感じで混ぜ込んでいます。

感想、意見、お待ちしています。

2　悲劇と悲しみと狂喜の予感？（前書き）

翔太郎「よっしゃ、本編第二話だぜ！！」
フィリップ「張り切るのはいいけどさ、翔太郎」
翔太郎「ん？何だ、フィリップ？」
フィリップ「作者の考えを検索してみたら今回、僕らの出番がない」
翔太郎「な、何だと！！！！」

空「あらあら、私達と同じね」
甲「そうだな・・・・・だが、俺達の登場は・・・・・」
空「まぁまぁ、それは考えないの・・・・・それにこれを利用してしばらくは、ハネムーン気分でいられるよ♪」
甲「空・・・・・」
空「甲・・・・・」
翔太郎「ガァ！！何でカップルっぽいのも混じってんだ！！」
虚空「ああもう、翔太郎さん、うるさい！！・・・・・絶望がお前のゴールだ！！！！」

虚空、翔太郎に555のグラ○イ○パクトらしい技を喰らわせて吹っ飛ばす。

翔太郎「グハァハァハは！！」
フィリップ「やれやれ・・・・じゃ、読者の諸君、本編を楽しんでくれたまえ」

2　悲劇と悲しみと狂喜の予感？

藤美学園　屋上

Ｓｉｄｅ　孝

放水でバリゲードごと『奴ら』を吹き飛ばせた孝は、思わず感心してしまう。

『奴ら』は、放水の水圧に負け、吹き飛ばされ、頭をぶつけ活動を停止させている。

「しっかし、まぁ、消火栓使うなんてよく思いついたな！！」

孝は、このアイディアを提供してくれた麗に称賛の言葉を送る。

孝の言葉が嬉しいのか、少しにこやかに麗が応える。

「だって、ホースからの放水の勢いって凄いじゃない。中学の時に消防の人が来て教えてくれたでしょう？」

最後の方の言葉は・・・・・忘れていた事を鋭く指摘されたような気が・・・・・

孝は、なかばやけくそに仕留め損ねた『奴ら』に向け、再び放水する。

「今度から忘れないようにするよ！！」

二度目の放水で孝達が逃げ込んだ天文部の部室と屋上とを繋ぐ階段にいた『奴ら』を一掃できた。

放水を終え、ホースを投げ捨てる。

孝は、隣にいる麗に問いかけた。

これからの『行動』について・・・・・

「中は、相当ひどい事になってるかもしれないが、本当にいいんだな」

「・・・・・」

麗は、ここまで来るまで『奴ら』を倒すのに孝が使っていた『金属バット』を黙って渡す。

それを彼女の肯定と認めた孝は・・・・・

「行くぞ」

孝の言葉に頷き、彼らは、走り出す。

麗が槍がわりにしているモップの柄を突きだし、奴らの体に突き刺す。

それでは倒せない・・・・・のだが、おさえとしては十分であった。

その『押さえ』でがら空きの頭部を遠慮なく叩き割る孝。

本来なら、バリケードも作った部室に立て籠れば一番いいのかもしれないが・・・・彼らの事情が変わったこともあり・・・・・動き出すしかなかった。

その事情とは・・・・・・３０分前に遡る。

３０分前

バリケードの方に奴らがぶち当たる音にどうしようも出来ない事をイラつきながら麗とこれからの対策を話そうとした時である。

「・・・・・携帯貸して」

「いくら麗のお父さんが警察官だっていったて、さっきのあれじゃあ・・・・・」

麗の親父さんは、この地区、東警察署に属する警部補である。

孝達は、幾度か１１０番を掛け、警察に連絡しようとしたが・・・・・『こんな世界』になってしまったせいか１１０番の回線は、パンクしてしまっている。

そんな中、麗は、どこに掛けようとしているのか？

「普段、絶対にかけちゃいけないって言う秘密の携帯、知ってるの」

なるほど、それだったら案外いけるかもしれない

孝は、１人、心の中で納得しながら麗に自分の携帯を渡した。

携帯を受け取った麗は、携帯に番号を入力し、電話をはじめた。

少しの待ち時間のあと・・・・

「通じた・・・・・」

麗は、ホッとしたように顔を緩めた。

孝は、その言葉に腰をあげ、麗の傍らで話を聞くことにする。

「あ、お父さん!!私たち学校で・・・・・」

『・・・・ザッ、ガガッ・・・・・んこの番号は・・・・・孝君か?もしもし・・・・君か?麗から・・・・・いたんだな?麗は・・・・ザザザザ』

傍らでもあったが、その電話は、酷くノイズがのっている。

「お父さん!!あたしの声が聞こえないの!?」

麗の言葉で電話口の麗の親父さんが電話相手が娘ではなく孝だと勘違いしている事に孝は、気づく。

『ザザザザ、ザッ・・・・・君のご家族・・・・・ザッ・・・・・街には・・・・・』

「お父さん!!お父さん!!」

麗が叫ぶがその直後・・・・・

ガン!!!!

何かをぶつける音が携帯から聞こえた。

その直後、電話が切れた！！
かけ直そうとしたが・・・・・いつの間にか携帯の画面に通話可能の表示を表すようなものであるアンテナマークが消え、変わりに『圏外』の文字が表示されていた。
「圏外？今通じたばかりじゃないの！？」
それでも麗は、携帯を操作しようとする。
「麗っ！？」
孝は、もう無理だと彼女の肩に手をやるが・・・・・
彼女は・・・・・携帯を両手に抱え、震えながら涙を流していた。
「お父さん・・・・・最後まで私だと気づかなかったよ！！」
・・・・・これが切っ掛けで孝達は、ヤケクソのような行動に出たのである。
とりあえず方針として、生き残りの生徒を探しながらも家を目指すことにした。
藤美学園は、寄宿制の学校ではあるが、孝達を含めた殆どの生徒が『地元』の出身である。
だからどうにかなると考えたからである。
「・・・・・お父さん、無事なの分かったし・・・・・あっ、孝のお家にも電話しないと」

階段をかけ下がりながら、麗がそんな事を口にする。
孝は、一瞬、立ち止まりそうになりなるが、足を無理矢理動かし、走り続けながら口を動かしていた。

「ヒマになってからでいいさ。親父は、出張でお袋も小学校の先生だから家にいない・・・・・それにお袋の方に連絡ついたらついでにああしろ、こうしろってウルセーだろうし」
「クスッ、こんなときに笑わせないでよ!!」

振り返らずに走り続けているため、麗の表情をうかがい知れなかったが口調からしてにこやかなものだ。

恋人であり、孝にとっては友であった『者』を孝に倒され・・・・・不自然に切れてしまった父との電話、ショックや不安から無理に笑っているのかもしれない。

孝も自身が発した言葉が本気ではなく・・・・・本当は『不安』だったからやせ我慢で口にしていた。

自分の学校ですらこんな『惨劇』なのだ・・・・・そして母親がいるのも『学校』・・・・・

今すぐにでも叫びたい・・・だが、麗を1人にしておけない。

孝は、どうしようもない事が多すぎだろと苦虫を磨り潰しながら走り続けていた。

「孝!?アレ!!」

麗が窓の外を指差しながら孝を呼び止める。

孝は、足を止め麗の指先の先を追う。

すると・・・・・

外を孝は、驚いてしまう。

自分達と同じくらいの年齢だろうか？
見慣れない制服を纏った青色の髪の子が砂煙をあげながら『奴ら』の群れへと突っ込み、『奴ら』を倒していく。

青色の髪の子の後ろから襲いかかろうとしていた『奴ら』を割り込んだ同じく見慣れない制服を纏った金髪のポニーテールの子が手に持った黒い棒のようなもので殴り付け、倒している。

何だ？アイツらは！？

孝は、状況がまったく理解できずに立ち止まってしまうが・・・・・

バリィン！！

窓ガラスが割れる音で現実に戻された。

「孝！！」
「どっからだ？とりあえず、行くぞ！！」

孝達は、音を頼りに再び走り始めた。

校庭
Ｓｉｄｅ　スバル

孝達が青色の髪の子、スバルを見る十数分前・・・・・

ユーノのフィールド系防御魔法を応用した攻撃で『死体の化け物』達が吹っ飛ばされ、地面に血の痕を残しながら転がる様をスバルは、なのはに支えながら見ていた。

「な、何なんですか・・・・・『アレ』」

「わからないけど・・・・・多分、ロストロギアか魔法が関係していると思う」

スバルの言葉になのはは、何かを押し殺すように答えている。

「まだ・・・・・いるみたいだ。移動するよ。なのは、スバル」

自分達のすぐ近くにいないものの『化け物』達を視界におさめたユーノが判断を下していた。

「うん・・・・・あっ、ちょっと待ってね」

ユーノの言葉に頷くなのはであるが移動するその前に・・・・・

陸士制服のタイトスカートの一部を手で裂く。

「あっ、えっ、な、なのはさん！？」

なのはの行動に目を丸くする。

「走るかもしれないからね・・・・・・スバルもちょっと恥ずかしいかもしれないけど・・・・・」
「え・・・・・キャア！？」
スバルのタイトスカートもなのはの手によって一部裂かれた。
「ユ、ユ、ユーノさんもいるのに何するんですか！！」
なのはの行動にスバルは、涙目で抗議した。
花を恥じらう十代の乙女には・・・・・この仕打ちは辛すぎる・・・・・
ユーノのは、こちらを見ないもののなのはの行動に頬を少し染めていた。
「こんな時だから我慢してね・・・・・ユーノ君、ごめん」
スバルにそう言い聞かせるが最後の方は、ユーノへの謝罪となっていた。
「気にしないで・・・・・正しい判断だから」
「う、うん」
《そうですよ。それにマスターユーノは、別にかまわないでしょう。何せ先日、マスターユーノは、高町一尉を『抱・・・・・》
「「《セラヴィー！！！！》」」
セラヴィーの発言にユーノ、なのは、レイジングハートがあわてて止めに入る。
スバルは、何の事かわからないまま取り残されてしまう。

「ハァ・・・・・急ぐよ」
「うん」
「はい」

数秒後、ユーノ達の静かな言い争うが終わると走り出した。
走り出すと・・・・・見えていなかったものも見えてきた。

「ヒィ、た、助け！！」
「あ、ギャガギャアアア！！」

未だ、おこる生者を喰らう光景。

逃げ惑う生徒達。

「・・・・・酷い」
「原因は・・・・・なんなんだ？」
《わかりませんですが・・・・》
《噛みつかれた場合でも必ず『死亡』・・・・・肉体的リミッターの解放・・・・・死亡後、『化け物』へと変貌・・・・・データが少なすぎます》

前を走るなのはとユーノ達がそう口にしていた。

一方、スバルは・・・・・
《大丈夫ですか、『バディ』？》
「・・・・・大丈夫じゃないかな・・・・・」

かなり生気を蝕まれていた。
彼女自身、大きな災害にも巻き込まれた事もあったが・・・・・これは過酷すぎる。
死体が動くなどと言う光景は・・・・・
なのはさん達は・・・・・何で彼処まで冷静でいられるの？
スバルがそう疑問に思ったら自分の相棒であるデバイス『マッハキャリバー』が発言していた。
《・・・・・高町一尉とスクライア司書長も何も感じていないわけではないみたいですよ》
「えっ？」
《高町一尉は、先程からスクライア司書長と手を繋いでおりますが、あれはスクライア司書長からであり、スクライア司書長が高町一尉を引っ張って走っています》
「そ、そうなの？」
《はい、スクライア司書長も心拍数上昇、呼吸数に明らかに走ったせいではない乱れを感知しています》
マッハキャリバーの言葉にスバルは、前を走る2人を見る。
確かになのはは、ユーノに引きずられるように走り続けている。
ユーノもユーノで息が整わないまま、走り続け、目も忙しなく動かしている。
なのはさん、ユーノさんたちも苦しんでるんだこんな・・・・・地

獄みたいな光景を・・・・・・

スバルは、自分だけが苦しいのではないと知る。

と・・・・・・

「た、助けて！！」

「！！」

叫びにスバルは、反応していた。

その声がする方向を見ると・・・・・・1人の女子生徒に『化け物』が無数によりたかっていた。

それを見たスバルは・・・・・考えるよりも動いていた。

「マッハキャリバー！！」

《オーライ、バディ！！》

「スバル！？」

「ま、待って！！」

走り出したスバルは、なのは達の制止を聞かずにマッハキャリバーに展開を指示する。

右手と両足に光が収束、右手にリボルバーナックルの偽装モードである手の甲まで覆う籠手と両足にローラースケートであるマッハキャリバーが装着された。

マッハキャリバーがローラーを回転させスバルを突き進ませる。

「うぉおおおお！！」

『化け物』の一体を殴り付け、さらにマッハキャリバーの勢いをのせ、二、三体を殴り飛ばす。

当然、スバルも返り血を浴びる事となったが・・・・・今のスバルには関係なかった。

スバルは、女子生徒の回りの『化け物』達を掃討すると女子生徒を抱き上げる。

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ありが・・・・」

「！？」

抱き上げた女子生徒は、口から血を吐き・・・・・生き絶えてしまう。

「そ、そんな・・・・・」

スバルが目の前で命の灯火が消えたことにうちひがれていると・・・・・

息絶えた女子生徒の指が動きだし、スバルの腕を掴んだ。

「いっ、え・・・・・」

「スバル！！」

《フープ・バインド》

ピンク色の光が女子生徒の口を覆い、さらには体を縛り付け間一髪、

スバルに噛みつかせさせなかった。

「ハァ！！」

それと同時に黒い槍のようなものを持ったユーノが抱き上げた女子生徒の体、頭の順に突き、頭で活動を止めさせることができた。

「大丈夫かい、スバル」

「ユーノさん・・・・・な、なんで」

目の前で起こった光景を理解しきれないスバルは、自分に襲いかかろうとしていた遺体を抱えながらユーノに問いかけた。

ユーノは、悲しげな表情で口を開く。

「こうしなかったら君は・・・死んでいた」

「で、でも・・・・・こんな事って・・・・・」

「スバル・・・・・」

必死に言葉を探すスバルにユーノは、近づいてくる『化け物』達に槍を振るいつつも静かに口を開いた。

「僕らは、生と死が隣り合わせの世界にいきなり跳ばされて・・・・・命の危険に曝されている。確かに僕らは、生きている人を救う『力』があるけど・・・・・全てを救うことはできない」

「そ、それでも！！」

「僕も・・・・・僕の力・・・・・でなんとかできるなら『彼ら』の遺体をこんな『戒め』から今すぐにでも『解放』してあげたいさ！！」

「ユーノ君！！」

ユーノは、叫びながらも槍先に浅い輝きを放つ翡翠色の魔力を集め、『化け物』達を切り裂いた。

なのはの叫びと共にユーノとスバルの背後から襲いかかろうとしていた『化け物』達は、いつの間にか近くに来ていたなのはから放たれた小さな魔力の塊で撃ち貫かれる。

「ユ、ユーノさん？」

「けど、それが出来ない・・・今の僕は、自分にとって『大切な人』や『仲間』をこんな世界で守りきれるかどうかもわからない、ただの1人の人間にすぎないからね」

「ユーノ君・・・・・」

悲しげでありながらも唇を噛み締めるユーノの表情だけでも彼の思いは、痛々しい程に伝わる。

スバルは、その言葉で何も出来ない事を悔しく思うのはユーノやなのはも同じであることを知る。

「・・・・とにかく皆と・・・・・」

《マスターなのは、マスターユーノ。ストレイドから各デバイスに念話通信です》

「えっ？」

「シンヤ達もこの近くに？」

「繋いでみましょう」

《《《了解》》》

セラヴィー、レイジングハート、マッハキャリバーが通信を繋ぎ、情報のやり取りがなされる。

フェイト達、ライトニング分隊は、この藤美学園の生徒2人と工作室に、刹那達は、学園の外から学園の校庭に入っている。

そして、『化け物・・・・・いや、奴ら』の情報も直接戦闘を行った刹那達とあくまでも冷静に『奴ら』の行動を見ていたシンヤによってもたらされてる。

概要だけをまとめるなら

・・・・・

1. 噛まれて、致命傷でなくても必ず死亡に至る。

2. 噛まれて死亡に至ると必ず『奴ら』と化し、こちらをおそう。

3. 視覚ではなく、聴覚によってこちらを認識。

4. 腕力等の力も肉体的リミッターを外されたように力強く、掴まったら逃れられない。

と言う情報を得たのである。

刹那から強制的に通信が切られたことで、通信が終わってしまったが・・・・・

「あっ、ティア！刹那さん！！」

スバル達から離れているもののどこかに向かおうとする刹那達の姿

を見つけた。
スバル達は、すぐにあとを追った。

Ｓｉｄｅ　刹那

「ハァアアアア！！」

刹那は、『奴ら』を引き付けるように叫び声をあげながら2本の偽装モードである木刀で『奴ら』の頭を潰す。

刹那の後ろからティアナの的確な射撃によって刹那の間合いにいない『奴ら』を倒されていく。

「！？ティアナ！！」
「えっ・・・・・イッ！」

刹那の言葉に後ろを振り返るティアナは・・・・・すぐ間近に迫った『奴ら』に小さな悲鳴をあげ、固まってしまった。

そんなティアナの援護に向かおうとする刹那であったが・・・・・

間に合わない！！

刹那は、一瞬、頭の中に無惨に喰い殺されるティアナの姿が浮かび、間に合わないとわかっていながらさらに足を早めた

・・・・・『奴ら』の歯がティアナへ届きそうになったその時！！

『奴ら』の腕や口が何かに縛られたように不自然な体勢で固まる。

そして・・・・・

「うぉおりゃあぁあああ！！」

陸士の制服を返り血で所々、赤く染めたスバルが『奴ら』を凪ぎ払う。

仕留め損ねた『奴ら』をユーノが偽装モードである黒いロッドで、なのはがティアナが先程から放っているような小さな魔力の塊で『奴ら』の頭を潰してくれた。

「ティア！！」

「スバル！！なのはさん、ユーノさん」

「無事だったか、なのは、ユーノ」

「うん」

「なんとか」

なのは達の制服も少なからず血で汚れているところを見ると・・・・・彼女達も『奴ら』を倒しながら進んできたらしい。

特にスバルとユーノは、近接戦を行ったらしく刹那と同じぐらい制服が血に染まっている。

「噛まれたりは・・・・・していないな」

「はい」

「うん」

「なんとか」

「そうか・・・・・！！先に行く！！」

刹那は、途中で会話を区切ると駆け出す。
駆け出した、そのままの勢いである教室の窓ガラスへと突っ込み、教室の中へと躍り出た。
「えっ、なに！？」
『奴ら』に襲われそうになっていた金髪の校医らしき女性が、躍り出た刹那の姿に驚きの声をあげる。
刹那は、その驚きの声に答える間もなく、木刀で2体の『奴ら』を倒す。
次ッ！？
後ろを振り向いた瞬間、2体の『奴ら』が刹那に襲いかかる。
咄嗟に『奴ら』の歯を木刀に噛みつかせて防ぐ刹那。
さらに『奴ら』の手が木刀にかかり、刹那が圧される形となる。
「グッググ！！」
圧される形となった刹那は、あまりの力強さに苦しみの息を漏らす。
動けない・・・・・
刹那がこのままでは殺られると思った、その時・・・・・
刹那を襲っていた『奴ら』の頭が何かに叩かれ、イビツに歪んた。

刹那の木刀から無力化された『奴ら』が離れ、助けてくれた人物を刹那は、見た。

鋭い目と木刀を持ち、現代の女侍と言っていいような雰囲気を醸し出した女子生徒であった。

「大丈夫か？」

女子生徒が残りの『奴ら』に木刀を降り下ろしつつ刹那に問いかける。

「ああ、助かった。礼をいう」

刹那は、体勢を戻し、礼を言いつつも残った『奴ら』の掃討に加わる。

頭蓋骨を砕く音が響く度に『奴ら』が倒されてゆき、2人の桁違いな強さによって教室に入り込んだ『奴ら』は、数分もかからないうちに倒された。

掃討が終わった後、刹那は、教室の壁に持たれ、至るところを噛まれ、苦しげな息をしている金髪の眼鏡をかけた男子生徒の姿を見つける。

傍らには、点滴をぶるさげる棒が血がついた状態で転がっていたため、彼が此処を守っていたことを刹那に示していた。

刹那と共に『奴ら』を倒していた女子生徒もその姿に気づいたようで、彼の肩に手をやって口を開いた。

「私は剣道部主将、毒島冴子だ。2年生、君の名は？」
「ゴホ・・・石井・かず・・・ゴボッ」
毒島冴子と名乗る女子生徒の問いかけに金髪の生徒、石井が名を告げるが・・・・・その口から血を吐き出している。
もうダメだなと刹那は、表情を変えないままその2人のやり取りを見続ける。
「石井君、良く鞠川先生を守った・・・・・君の勇気は、私が認めてやる・・・・・噛まれたものがどうなるか知っているな」
冴子の言葉に黙って頷く石井。
「親や友達にそんな姿を見せたいか？いやならば、これまで人を殺めたことはないが・・・・・私が手伝ってやる」
「お・・・・お願いします」
石井は、冴子の『救い』が今の自分にとって一番、必要なことであると理解しているのか、苦しい呼吸の中、笑って頷いた。
その返答に表情を変えないまま冴子は、立ち上がり木刀を構える。
「えっ、ちょっ、ちょっと何を！？」
校医の鞠川と呼ばれた女性が冴子を止めようとするが、刹那が冴子と鞠川の間に立ち、鞠川を止めた。

「えっ、あなたなにを！？」
「・・・・・お前は、止めないのだな」
刹那の行動に冴子は口を開いていた。

「・・・・・彼が望んだ事だ・・・・それにこの場で『殺らない』と彼自身が報われない」
「・・・・・ありが・・とう、ございマ゛ス・・・・・あ、あなたは？」
刹那の言葉が聞こえたのか、石井が刹那に問いかける。
刹那は、その問いかけに少しだけ表情を和らげながら口を開いた。
「俺の名は、刹那・F・セイエイ・・・・・君を『見殺しにした男だ』、覚えていてくれ」
「『見殺し・・・・・』って違うでしょ・・・・・」
刹那の言葉に弱々しく笑う石井。
と彼が刹那に再び口を開く。

「・・・・・刹那・・・・・さん」
「何だ・・・・・」
「おね・・・・・がいが、あります」
「叶えられないかもしれないが・・・・・聞いてやる」
「この・・・バカみたいな・・・・・てん・・・かいが・・・・・・終わるまで・・・・・鞠川・・・・・先生・・・・・を・・・・・ゴバ！！」

石井は、最後まで言葉を紡げずに血を吐き出す。

刹那は、最後まで言葉を聞かずとも彼が伝えたい事がわかった。

それを承諾するように石井に最後の言葉をかける。

「・・・・・了解した。この事態が終わるまで、鞠川校医を『守る』」

最後の刹那の言葉が聞こえたのか、石井は笑顔の表情となり、冴子からの『救済』を待つ。

「・・・・・石井君、君の思いは、確かに『受け継がれた』・・・・・だから『また、会える日』まで安らかに眠ってくれたまえ」

冴子が刹那と石井とのやり取りを聞いていたらしく、彼にそう告げると木刀を降り下ろす。

頭部の一部が少しだけへこみ、彼の命を奪う。

鞠川は、両手で口を覆った。

保健室の外まで来ていたなのは達もやり取りを見ていたらしく悲しげな表情で石井だった『遺体』を見つめていた。

また・・・・・1人、命の灯火が消えた。

工作室

ｓｉｄｅ　シンヤ

「よしと、これで数体ぐらいならなんとかなるかな？」
「シンヤさん、なんで疑問系なんですか？」
「わからないからだよ、エリオ。絶対に防げるものなんてこの世にはないからな」
「・・・・・あんた、ガキンチョ相手にかっこつけ？」

エリオとシンヤは、工作室にあった机と椅子とで扉にバリゲートを作り、一時的にでも気を休めるようしていた。

その間、コータ、沙耶、フェイトの３人は、工作室の工具を集めていた。

刹那との通信が切れたのを皮切りに校庭にいる他のメンバーとの通信を切ったシンヤは、その後、藤美学園でのこの事態の『始まり』を聞いていた。

なんでもクラスメートの小室孝が授業サボりから教室に戻ってきて、同じクラスメートの宮本麗を強引に教室から出させたのが沙耶達がこの事態を知る要因の１つであった。

もう１人、彼の友でクラスメートであった井豪永が直接、小室孝から事情を聞いたらしく、３人で教室を出ていってしまった。

それをクラスの『馬鹿ども』（沙耶の表現）は、イカれた等と揶揄していたわけだが、彼らがいなくなった数分後に校内放送が流れた。

校内放送が流れた直後、その放送を流した教員が『奴ら』に喰われたらしく苦痛と絶叫が放送が流れ、そして何も流れなくなった途端、我よ先にと生徒達が出口を目指して逃げ出していた。
生徒達がパニック状態あったまま逃げたせいもあり、ここまでの被害となったらしい。

「で、何があった？」
「これだけあったよ」

バリゲードを設置し終えたシンヤ達がコータ達が集めた工具を見た。
机の上には、カッター、レンチ、ニッパー、電動ドリル、マイナスドライバー・・・・・eat．eat．
と様々なものが見つかっていた。

「ぶ、武器に使うんですか？」

その光景にコータがそう呟いていた。

「ああ、そうだ・・・・・本当なら情報を得るのが先決だが・・・・・今は、こんな武器になりそうなところにいるんだ、俺みたいな『改造モデルガン』みたいなものじゃなくて、『攻撃力が高い武器』がこれから必要になってくるだろ？」
「そりゃ、こんな事態ですから・・・・けど・・・シンヤさんから片っ方『モデルガン』借りればいいと思いますよ？二丁拳銃って現実的には、デメリットのほうが多いですし」
へェ・・・・・こいつ、ただのミリタリーオタじゃないみたいだな

シンヤは、コータが偽装モードのストレイドに強い興味を持っていた時点から色々と探りをいれる会話をかわしていたがその結果、彼がただのミリタリーオタクではない事に気づいていた。

そんな内心抱える考えを顔に出さないようにしつつもシンヤは、口を開く。

「・・・・・まぁな。さっきはお前達、2人だったからなつい、二丁で構えちまった。いつもは、一丁で構えてんだが・・・・・」

「ダメですよ、今度から銃は・・・・・」

「ああもう!!この腐れオタクども!!いい加減、オタク話をやめろ!!!!」

流石に主題から離れすぎたせいもあり、沙耶がキレた。

「まぁまぁ、高城さん。落ち着いて」

「そうですよ」

フェイト達が止めに入ろうとするが・・・・・「これが落ち着いていられるかってのよ!!とにもかくにも!!デブヲタとガンバカ（シンヤ）は『どうせ』、軍オタや銃オタとか言う生命体でしょ？」

なぜか、酷い言われようだなとシンヤは、心の中で思った。

「なら、リーサルウェポン2って映画ぐらい見たことあるわよね？これ、あんたら何だか分かる？」

シンヤの知らない映画のタイトルをいいながら沙耶は、コータとシンヤにある『工具』を指差す。

それは・・・・・

「『釘打機』・・・・・ガス式か」

釘打機であった。

形的に銃身が極端に短いライフルを思わせる形だが、ライフルほどの大きさではなく精々拳銃程度の大きさであった。

成る程な、コンプレッサー式は、外付けのエアポンプが必要になってくるがガス式ならボンベにガスがあれば打てるし、それに射撃武器の代わりになる。難しいけどピンポイントで急所を撃てば人を『殺せる』しな

シンヤは、コータから釘打機を回してもらい実際に手に持って感触を確かめた。

本体と釘、ガスボンベを含めた重さは、４、５ｋｇ程度・・・拳銃として使うには重すぎる・・・そうなってくると両手で構えられるようにしなきゃいけないな・・・・・

となると・・・・・・・・・・

簡単に構えたり、片手で持った感覚からシンヤは、デバイスマイスターとしての資質をフル活用して釘打機の改造策をうちだしていた。

「ありがとよ、コータ。しかし、ガス式で助かったな」

「えっ、何でです？」

エリオが不思議そうに聞いてくる。

「あのね。アカチビ、映画みたいなコンプレッサー式じゃバカでっかいから持ち歩けるわけないでしょ」
「・・・・・そうなんですか？」
沙耶に『アカチビ』と呼ばれたのを根に持っているのかエリオの口調にイラツキが混じっている。
「・・・・・『ツンデレテール』のお嬢さんがよくもそんな事を知ってるな」
「なっ」
「「「ブッ！！」」」
家族同然のエリオの仕返しを含め、シンヤは、トゲのある言い方で沙耶を称賛していた。
その言葉を聞いたコータ達が一瞬吹き出した。
そして当の『ツンデレテール』の沙耶はと言うと・・・・・
「だ・れ・が『ツンデレテール』ですって！？バカいってんじゃないわよ！！アタシは、天才なんだからなんでも知って・・・・・！！」
沙耶の言葉が途中で途切れ、沙耶の視線は、教室と廊下を仕切る窓ガラスを見ている。
シンヤ達もつられて窓ガラスを見たら・・・・・『奴ら』の影が写っているではないか

『ツンデレじゃなくて、バカテール』が騒ぎすぎたか・・・・・・

シンヤは、刹那達との通信でなぜこうなったのかを理解していた。

「来てるね」

「ああ」

傍らにいるフェイトがいつの間にか寝かせていたキャロをフリードごと抱き上げていた。

その表情は、執務官のフェイト・Ｔ・ハラオンの表情となっている。

エリオも強ばった表情となっている。

そんな中・・・・・・

「・・・・・釘の残りは、問題ないな。重さは・・・・・４ｋｇ位、旧式のライフル並だな」

コータは、釘打機をいじっている。

当然そんなコータに沙耶は・・・・・・

「ちょっとアンタ！！廊下に来てんのに何やってんのよ！！」

かみついたが・・・・・・

「このままじゃ安定して構えられない」

沙耶を無視して、作業を進めるコータ。

とコータの視界の先にシンヤも考えていた釘打機本体を補強するの

に丁度良さそうな『定規』のようなものがあった。

それでシンヤは、コータの考えが読めた。

それなら・・・・・

「コータ」

「何です？」

「２分稼ぐ。その間に完成させろ」

「・・・・・Ｙｅｓ　ｓｉｒ！！」

シンヤの言葉を理解したのか、コータは、動かす手を早めていた。

それと同時に工作室の扉に『奴ら』が当たってくる音と扉とバリゲードが嫌な音をたてる。

沙耶の表情が恐怖のものへと変化していく。

「フェイト、椅子を出来るだけ集めるのを手伝ってくれ」

「うん、わかった。エリオ、キャロをお願い」

「は、はい」

キャロをエリオに預け、フェイトはシンヤの指示通りに椅子を集め始めた。

「ちょっ、あんたら」

沙耶がフェイト達の行動にかみつくが扉が軋む音で怖じ気づいている。

やがてバリゲードによって動かせない扉の窓ガラスが割れる。
ちょっと防ぐか
そう考えるのと同時にシンヤは、動いていた。
シンヤは、机の上に転がっていたカッターやレンチ等を掴むと割れた窓の先にいる『奴ら』へと投げつけた。
ある奴は、頭にカッターを突き刺され、ある奴は、レンチがぶち当たり、窓枠から姿を消した。
そうこう、しているうちにバリゲードが扉ごと押しやられ、バリゲードを『奴ら』が突破する。
「イッイイ！」
「！！」
沙耶がその光景に小さな悲鳴をあげ、エリオが間近に見た『奴ら』にさらに表情を強張らせた。
フェイトも固い表情のまま『奴ら』を見つめた。
・・・・・苦しんで死んだんだな・・・・・なら俺にできる事は・・・・・
無惨に引き裂かれたり、噛みつかれたあとが生々しく残る『奴ら』を見てシンヤは、何も感じずにただ『死者』をこれ以上の愚弄から

救うためにと考えていた。

何も感じなかったのは、やはり『自分』の生まれを知ってしまったからだろうか？
自分が生まれた意味も知った・・・・・その時から・・・・

「・・・・・くらいな」

そう、頭の片隅で意識しながらもシンヤは、フェイトにも集めてもらった椅子を『奴ら』へと連続して投げつける。

力強く投げつけた椅子は、派手に『奴ら』にぶち当たり、何体か転がしたり、何体かを倒すことができた。

だが、それでもすべてを倒すことができずに何体か工作室、半ばまで雪崩れ込む。

『奴ら』の一体がこちらに恐怖を植え付けるように口を開いた。

「いやあぁぁっ」

その姿に沙耶が悲鳴を上げる。

と次の瞬間、その口を開いた奴の頭に釘が突き刺さった。

「良し」

その声に後ろを振り返ると釘打機に本体を抱えられるように定規を２つ取り付け、簡易的な照準機のつもりなのか、途中で折った鉛筆

が本体上部に取り付けられている・・・・・一言で言えばガムテープでそれらを取り付けた改造釘打機を両手で構えたコータの姿がある。

だが、その表情は、気弱なものではなく凶悪なものとなっていた。

「平野！？」

「コータさん？」

「なんか怖い・・・・・」

沙耶とエリオ、フェイトがあまりの豹変ぶりに驚きを隠せない。

やっぱりコイツ・・・・・

ただ1人、シンヤだけは、コータの本質らしいものを見抜いていた。

「大丈夫そうだな。・・・・・コータ」

「はい」

「なるべく、後ろの『奴ら』が巻き込まれるように倒せ、コケさせて転がしておけば仕留めきれずとも俺が椅子なんかを投げつけて仕留める」

「Ｙｅｓ　ｓｉｒ！！！！」

そんな驚きがあった中で、コータが武器を完成させて攻撃に加わったことで次々に『奴ら』を打ち倒していく。

「高城さん、フェイトさん、そこら辺にあるドリルや釘、ボンベを適当な袋に入れてください。あ、あと工具箱も」

釘打機を『奴ら』に打ちつつもコータは、高城達に指示を出してい

た。

「わかった」

「ちょ、このデブヲタ！！私に命令するなんて、何様のつもり！！」

「・・・・・命助けてもらっといてその言い方はないんじゃ？」

それに命令ではないんじゃとシンヤは、両方が平たいものであるトンカチを投げつけ終え、もう『投げ』たら代用のきかない工具ばかりとなったので迎撃方法を偽装モードのストレイドを片方だけ両手で構え、『奴ら』の頭を撃ち抜きながらも沙耶の言葉に首を傾げていた。

「・・・・・お願いします」

「・・・・・わかったわよ。とにかく、ここから逃げるわよ！！」

「エリオ、キャロをお願い」

「はい！！」

工作室内に入り込んだ『奴ら』の掃討を終え、工具をあらかた巾着袋と誰かのだろうか工作室に置き去りにされていたバックに詰め込み終えるとコータ、シンヤ、沙耶、フェイト＆ａｍｐ；フリード、エリオ＆ａｍｐ；キャロの順に工作室を飛び出した。

生き残るため、各々が行動していく・・・・・

原因を探求する暇もなく・・・・・今は、ただ・・・・・戦い続ける。

2　悲劇と悲しみと狂喜の予感？（後書き）

フィリップ「作者、ちょっと聞きたいことがある」
虚空「ん？どうしたんです。フィリップさん？」
フィリップ「検索をかけたたらこの作品の原作、学園黙示録は、まだ未完の作品だ・・・・・そんな作品の終わりをどおするんだい？」
刹那「確かに・・・・・アニメ版も大幅な繰り上げを実施して何かをやろうとしているが・・・・・」
なのは「作者さんの好みもあるからどんな終わりになるかわからないしね」
虚空「その件か・・・・・てっか、もうあらすじに『キーワード』流してあるけど」
フィリップ「えっ、僕の検索に引っ掛からなかったけど？」
虚空「そりゃ、そうだ。まだ決定的な『キーワード』がないからだ」

孝「決定的な『キーワード』？何だそれ？」
虚空「・・・・・感がいい人は、俺が混ぜた『４つ目』の作品に気づいたはず・・・・・今は、ただこれだけ。今後も感想、ご意見、待っております！！」

3　弔う者と集まる者達（前書き）

虚空「久々の投稿になってしまった・・・・・」
シンヤ「・・・・・俺たちのほうは？」
虚空「すまん、諸事情や色々と活動中、さらにはエブリスタで掲載中の作品があって進みきれて・・・・・」
なのは「消えなさい・・・・・」
虚空「ギャアアアア！！！！！！」

なのはの魔力砲炸裂。

甲「（゜ロ゜）・・・・・あの人1人でグングニルなみかよ」
フィリップ「最悪、波動砲なみだろうね」
冴子「小室くん、変な真似をしたらアレが飛んでくると思った方がいい」
孝「・・・・・（汗）」

3　弔う者と集まる者達

？？？　山中

Ｓｉｄｅ　Ｗ

「うらぁ！！」

『化け物』の群れの中に突っ込んだＷは、出会い頭の『化け物』を殴り付け、２体目に蹴りを喰らわせる。

さらにそのまま殴り、蹴り、『化け物』達を倒していく。

「チィ！どこのどいつだ『こんな事をさせてる奴』は！！」

Ｗの体の主、翔太郎が怒りをあらわにしながら戦い続けている。

翔太郎達にとってこんな死者を『愚弄する行為』は、二度目であった。

あの時も怒りを顕にしたが、今回の『これ』は人や街を『愛し』ている彼らにとって痛みともなう怒りなのである。

『！！翔太郎、後ろ！！』

「何！？・・・・・・うぉ！」

ドライバーにセットされたメモリとともに翔太郎の体に宿るフィリップの意識が翔太郎に警告を出すと同時に右腕を『動かす』。

すると・・・・・右腕が『彼ら』の後ろから襲いかかろうとしていた『化け物』に裏拳を喰らわす。

裏拳を喰らった『化け物』が倒れ、動かなくなる。

「フゥ！フィリップ、助かったぜ」

『まだ来るよ！！』

フィリップの声の通り、『化け物』達が次々、Ｗに襲いかかる。

『ヒートメタルでいくよ』

「ああ！！いくぜ！！」

フィリップの言葉に従い、ダブルドライバーの展開を一度解くとドライバーに挿入されていた２本のメモリを抜く。

代わりに左手に銀色のメモリ、『闘士の記憶』を内包する『Ｍｅｔａｌ』、右手に赤色のメモリ『熱き記憶』を内包する『Ｈｅａｔ』を持ち、そのままドライバーに挿入し、展開した。

《Ｈｅａｔ！！／Ｍｅｔａｌ！！》

効果音が鳴り響く。

２つのメモリ特性を同時に引き出すＷの変身システム『ハーフチェンジ』によって右半身が赤い色へ左半身が銀色へと変わり、左背部から専用武器であるロッド『メタルシャフト』が姿を表す。

『熱き闘士』へとその姿を変えたＷは、背中からメタルシャフトを抜き、『化け物』達を凪ぎ払う。

W、全9フォーム中、打撃系攻撃力と防御力が高いフォームである『ヒートメタルフォーム』は、ヒートメモリの力を受け、メタルシャフトから炎を巻き上げつつもメタルシャフトを振るう。

「うおりゃ！」

メタルシャフトによって叩かれた『化け物』達は、骨が砕け散る音、手足を不自然な方向に折れ曲がったり、吹き飛ばされ、火だるまとなったりするものもいる。

それでも・・・・・

「何で動けるんだよ！！」

『火だるまとなっても動けるのか・・・・・厄介すぎる』

手足を折られ、吹っ飛ばされ、火だるまになろうとも平気な面で『化け物』達は、Wに襲いかかってくる。

「くそったれが！！いったいどうすりゃいい！？」

『翔太郎、頭だ。『頭』を潰してくれ！！』

「あん？何だって『頭』なんだ」

フィリップの言葉に疑問の声をあげる翔太郎。

『アレを見てくれ、翔太郎』

「あん？・・・・・さっき倒した奴じゃねえか」

フィリップの意志が指し示すものは・・・・・Wになってから『頭』を殴り付けた『化け物』とファングによって『頭』を潰された2体

の『化け物』であった。

『『奴ら』、頭を潰されると理由はわからないけど活動を停止するらしい』

「なるほどな・・・・・うん『奴ら』？」

『いつまでも『化け物』扱いでは、ドーパントと同じだろう？だから『奴ら』さ』

「わかったよ。『奴ら』の発生原因はわかるか？」

『わからないけど、『噛まれたり』したら『奴ら』になるらしい・・・・・詳しくは、後で検索をかける』

「了解だ・・・・・だったら今」

『やるべき事は・・・・・』

「『彼らを救う』」

Wは、その思いと共に力を振るい続ける。

次第に『奴ら』が倒されてゆき、Wの体が返り血に染まりゆく。

「さっさと別の場所に行って、生きてる連中を救うぜ」

『ああ』

Wは、ある程度数を減らしたところで一気に勝負をつけることにする。

ドライバーに挿入されている『Ｍｅｔａｌ』メモリを抜き、メタルシャフトに組み込まれているドライブスロットに抜き出した『Ｍｅｔａｌ』メモリを挿入した。

《Ｍｅｔａｌ！！ｍａｘｉｍｕｍ　ｄｒｉｖｅ！！！！》

メタルシャフトの両端から炎が爆発的に噴き上がり、彼らは『必殺技』の名を叫ぶ。

「『メタルブランディング！！』」

その状態でメタルシャフトを振るうと炎が衝撃波となって拡散し、『奴ら』を焼き付く。

この一撃でこの周囲にいた『奴ら』を一掃することに成功する。

「よっしゃ、次に行くぜ・・・・・とその前に」

Wは、足元に咲いていた小さな白い花を取る。

『翔太郎？』

「まぁ、待ってくれ。フィリップ・・・・・何処のどいつがこんな事をしでかしたかわからねぇが・・・・・必ず探しだして『罪を数えさせてやる』・・・・・だから今は、安らかに眠っていてくれ」

『翔太郎・・・・・』

花を空中に投げ、翔太郎が死しても何かに囚われ続け人を襲い、自分達によって倒された『奴ら』の本来の姿である『人』に安らかに眠れるようにと手向けを行う。

「・・・・・よし、行くぜフィリップ！！」

『ああ』

数瞬の間をおいてW・・・・・翔太郎達は、駆け出す。

そんな彼らを迎えるかのように彼らの大型支援車両『リボルキャリ

ー』がその身を開き、彼らのバイクである黒と緑の二色に塗り分けられた『ハードボイルダー』をプラットホームに載せ待ち受ける。

Wがハードボイルダーに股がるとハードボイルダーを載せたプラットホームが後ろにスライドし、後輪を含むハードボイルダー後部、緑色の部分・・・・・『テールユニット』を切り離す。

そして、一旦、プラットホームが前にスライドし、リボルキャリーの後部のリボルバーの回転式弾倉のような部分『リボルハンガー』が回転し、先程までハードボイルダーが付けていたテールユニットがとは違う赤色のテールユニット、飛行戦テールユニット『タービュラー』がセレクトされる。

そのユニットがハードボイルダーの後ろに来るとプラットホームが後退し、そのユニットとハードボイルダーが接続される。

プラットホームが再び前に出ると前輪が折り畳まれ、折り畳まれていたタービュラーユニットの翼が展開され、『ハードボイルダー』から『ハードタービュラー』へと換装を終わらせた。

「うっし、行くぜ！！」

Wがハードタービュラーのハンドルを捻るとハードタービュラーは、浮かび上がり、空へと駆け上がる。

一定の高度となるとハードタービュラーの進路を街へと向けた。

少しでも人を救うために・・・・・

藤美学園
Ｓｉｄｅ　コータ

３階の工作室を出たコータ達は、物陰に隠れながら『奴ら』の行動を見ていた。
沙耶が水に濡れた雑巾を『奴ら』の一体に当てる。
だが、その雑巾が当たった『奴ら』は、何もなかったかのように動き回っている。

「何やってるんですか、高木さん？」

その光景に洗い場の台の陰にしゃがんだ沙耶の隣に立っていたコータが彼女に問いかける。
ちなみにコータの間には、フェイト、エリオ、未だに気を失っているキャロ、そしてコータに背を向けながら警戒するシンヤが入っている。

「まぁ、見てなさい」

そう言いながら再び水に濡れた雑巾を投げた。
その投げた雑巾はロッカーに当たり、派手な音をたてる。
その音に導かれるように一体の『奴ら』がロッカーにぶち当たった。
これは・・・・・

「・・・触覚と視覚がないみたいだな」

少しだけ首を後ろに傾けたシンヤが沙耶が行ったことを見ていたらしく呟きを漏らしていた。

高城がシンヤの言葉に頷いた。

「ええ、そう。痛覚とかないのよ、音にだけ反応してる。視覚とかもないわ、でなけりゃロッカーにぶつかるはずないでしょうに」

「けど、何で視覚じゃなくて『音』なんでしょう？」

「そこはわからないが・・・・人間が一番外部から情報を得ているのは視覚だ。言い換えれば、『視覚からの情報』を脳で処理して人間は、『物』を認識する。だが、『奴ら』は、『奴ら』になった時点で脳の活動に変化が生まれるらしい」

「何でそんな風に思うのよ？」

エリオとシンヤの会話に沙耶は、首をかしげた。

「推測域を出ていないが・・・・『奴ら』を動かしているのが脳から発せられている電気信号なら、『音』を認識しているのも・・・・・・恐らく『脳』だ。だから脳自体に何かが入り込んでいるのかもしれない」

それだけ沙耶に伝えるとシンヤは、再びコータ達の後ろの警戒に戻った。

それを聞いた沙耶はと言うと・・・・・・

「・・・・・なるほどね。それも一理あるかも知れないわ・・・・どこ噛まれたって血液の循環で身体中に入り込んだ『何らかの細菌かウィルス』が全身に回って脳や内蔵を破壊、あるいは作り替えて

いるとしたら・・・・・その過程で内側がズタボロになって血を吐いて、何かに取りつかれたように動き回るのも頷けるわね」

と納得していた。

「・・・・・熱とかは？」

コータは、彼女らの会話を聞いて逆に問いかけていた。

熱と言うより体から発せられる赤外線は、人が生きている証拠でもある。

それすら認知されるとなると・・・夜の暗闇の中でも追っ掛けてくる・・・・・コータは、その心配が頭に過っていた。

「そうね・・・・・視覚や触覚とかが死んでるならわからないわ・・・・・けど、そのうち『嫌』になるほど試せるわよ」

洗い場の影から立ち上がりながら、沙耶がそう口にした。

「行くわよ」
「はい」
「うん」
「わかった」

高城がここで調べる事は、済んだと言わんがばかりに移動の指示を出す。

フェイト達もそれに従う。

「やっぱ・・・・・外にですか」

コータだけがそう高城に返事を返していた。

「？何が言いたいのよ？」

「いやぁ・・・・・歩くの苦手で」

「ハァ？」

「はい？」

「えっ？」

「・・・・・」

コータ自身の告白に上から高城、フェイト、エリオ、シンヤの順に呆れを通りすぎ何でと言った表情になっている・・・・・

ただし、シンヤだけは『こんな時』になにほざいてんだと言いたげに目でコータを睨んでいた。

シンヤから睨まれたときには、肝を冷やしたが実は、コータの中で歩くのが苦手と言うのは、少し嘘も含まれていた。

自分みたいな射撃系は、一方向だけ、距離を置いて敵を相手にする分には強いものの、背後や真横を狙う際には振り向く動作が必要になってくる。

そして視線と得物、そして狙う動作にはコンマ何秒かの間が生じてしまう。

そのコンマ何秒かで背後まで近づかれたり肉弾戦に持ち込まれれてしまえば、その『肉弾戦』が無理な自分にとって終わりなのである。

だから外に逃げるよりも背後さえ気をつけていれば一方向のみに集中でき、しかもほぼ通路通りに『奴ら』が歩いてくるので自分にとっても迎撃しやすいのである。

・・・・・その為、コータは外に出るのを渋ってしまう。
当然、その言葉を聞いた・・・・沙耶はと言うと・・・

「これだからデブヲタは！！贅沢は免許取れる歳に・・・・・・」

沙耶の言葉が最後まで紡がれる前にシンヤが両手にモデルガンを持ち、沙耶とコータの両サイドに発砲した。

すると沙耶の声に反応した2体の『奴ら』の頭に当たり、その活動を停止させた。

「今・・・・・実証したことで呼び寄せてどうする。バカテール。デブヲタ」

シンヤは、怒鳴りつけたり叱るのでもなくただ静かにいい放つが・・・・・瞳に色を映さない確かな怒りにコータは、冷や水を頭から被せられたような錯覚を覚えた。

怖い・・・・シゴキよりも先生に叱られる時よりも・・・・・・命を刈り取られるぐらいに怖い！！
下手したらＫｉｌｌ（殺される）される！！

コータは、震えが止まらなくなる。

「バカテール・・・・・・ってな・・・・・」
「・・・・・喋れないようにしてやろうか」
「・・・・・謝るわよ」

流石の沙耶もシンヤの怖いまでの覇気に怖じ気づく。

（フェイトさん、シ、シンヤさんて・・・・）
（ごめんね。彼、自分から危機を作る人に対しては強く怒る事があるから）

コータは、小声でフェイトにシンヤの人柄を問うと何故か謝りながら彼の人柄を教えてくれた。

シンヤは、怒りを自分の中で沈め、偽装モードのストレイドを片方だけ両手で構えつつも再び寄ってきた『奴ら』の頭に小さな魔力弾を撃ち放ちつつも沙耶達に問いかける。

「・・・・・とにかく、外に逃げるって事は学園外に出るんだよな」
「ええそうよ。こんなところに立て籠っていてもじり貧よ。まったく、贅沢は言いたくないけど車を運転できればとつくづく思うわ」
沙耶が爪を噛みながら苛立っている。

そんな彼女を視界の片隅に納めつつもシンヤは、彼女の意見に理解を示していた。

確かに座りっぱなしで体自体がエコノミー症候群等の様々な症状や肉体的ダメージが発生する可能性もある・・・が体力を消費しない、さらに車の種類によっては『奴ら』を気にせずに進めたり、一応安

全な寝床にも車は使える。

けど・・・・・運転手がいないか・・・・

シンヤは、迎撃に加わったコータと一緒に、工作室を出てから情報を得ることと幼いエリオ達の事を考えた上で決めた一時的な目的地である職員室への道を拓くため邪魔な『奴ら』だけを倒しながら悩んでいた。

なぜならコータと沙耶に自分達の身分を『高校生』と言ってしまった事がまずかったのだ。

高校生と言ってしまったためコータ達は、シンヤとフェイトの年齢は大体１７～１８歳程度だと考えているはず。

本当は、２４歳と１９歳で共に自動車免許所有者であるが、ここで発言を覆したら・・・シンヤ達の立場やまだ合流していない刹那達が怪しまれてしまう。

勿論、免許を持っていないが運転できると言えばすぐにいけるが・・・・それはそれで揉めるような予感がした。

まぁ・・・・・最悪、俺が無免許で運転したことがあるってワルガキを演じればいいか

道を塞ぐ『奴ら』の掃討を終え、足を進める中でシンヤは、適当な言い訳を考え付きそれを口にしようとした。

が、その前にコータが口を開いた。

「あの、免許は持っていませんが車なら運転、でき・・・・ます」

「「えっ？」」

シンヤと沙耶の言葉が見事にハモった。

沙耶がジロリとコータを見ながら口を開く。

「本当なんでしょうね？」

「はい」

コータが沙耶の睨みに恐れ、弱々しい返事で言ったことを肯定した。

そして沙耶が口を閉じ、数秒の沈黙が降り立つ。

沙耶が再び口を開いた時には・・・・・コータの言葉を聞いた時点でシンヤの頭の中に描いていたプランを口にしていた。

「なら・・・・・絶対に職員室に行くわよ。彼処には、教員達の車の鍵があるわ。その内の１つをとって車で逃げるわよ」

「えっ？ええ・・・・・」

コータが沙耶の言ったことについていけない中でシンヤが口を開く。

「了解。ただ、俺達は、この学校の構造に関してはわからんから君らが先導してくれ、俺が殿を務める」

そのシンヤの発言に沙耶はうなずく。
「わかったわ。いくわよ、平野！！」
「あっ・・・Ｙｅｓ　Ｉ　Ｍａｍ！！」
コータが沙耶の前に出て警戒するように釘打機を視線と共に左右に振る。
「先に行け、フェイト、エリオ」
「うん」
「はい」
フェイトとフリード、エリオとキャロが沙耶達に続く。
その姿を確認したシンヤは、刹那達に念話を送る。
刹那、なのはさん
シンヤか
どうしたの？
こっちは今、職員室に車の鍵を取りに向かっている
！！こっちもだ
そっちも？
刹那の言葉にシンヤは疑問が頭を占めた。
とそんなシンヤにユーノは答えをくれた。
さっき、ここの校医と生徒さんの１人と合流できたんだ。それでこ

っちでも車の話が出て、今鍵を手に入れるために職員室を目指している

！！了解、皆とは職員室で落ち合う

・・・・・了解

うん

わかったよ

お互いに無事の再会を祈っておく

シンヤは、念話を終わらせると回りに『奴ら』がいないかを警戒しつつもフェイト達の後をついて行く。

Ｓｉｄｅ　冴子

保健室から出た冴子達は、職員室を目指して『奴ら』が蠢く廊下を小走りで進んでいた。

自分を含め、校医の鞠川先生と保健室で合流したこの地方には、修学旅行で来ていた実星学園の生徒だと言う刹那、なのは、ユーノ、ティアナ、スバルの7人で進んでいる。

進んでいる最中に『奴ら』が食い付こうと襲いかかってくるが冴子は、片手で弾いたり、木刀でいなして歩を進めている。

「職員室とは・・・・まったく面倒な・・・・」

冴子は、進みながらも愚痴を溢す。

石井君を葬った後、簡単な自己紹介を済ませた冴子達は、学園外に出てからの移動手段確保のために車のキィを取りに職員室へと向かっている最中である。

「だって車なら逃げられるでしょ？だけどキィはみんなあそこなんだもの」

「だからって鍵ぐらい自分で管理しておけば・・・・」

「仕方がない事だ。誰もこんな事態を予測できない」

保健室から持ち出した医療用バックを持った鞠川先生の発言に鞠川先生のすぐ後ろにいるティアナが少し眉を潜めるが、刹那が冴子の隣で左側から襲いかかる『奴ら』をいなしながら会話に参加した。

ユーノも刹那の発言に補足するように口を開いた。

「それに帰る時以外に使う機会がないから仕方がないよ」

刹那と冴子の後ろからユーノがロッドをつき出して『奴ら』を壁に激突させる。

ちなみに自分達の配置は、進行する方向に刹那と冴子がツートップで前を固め、そのすぐ後ろにユーノ、ユーノの後ろに鞠川先生となのは、さらに鞠川先生のすぐ後ろにティアナ、殿にスバルと言った順に進んでいる。

冴子と刹那が進路を塞ぐ『奴ら』をいなし進路を開きつつ、ユーノが冴子達のカバーに入り、さらに途中、いなした『奴ら』が復活した時には、ティアナが射撃で頭を潰し、スバルが体を殴り付けて吹き飛ばしつつも全員が進む。

「？ねぇ倒しちゃわないの？毒島さん達なら簡単そうなのに？」
「そうですよ、これぐらいなら」
刹那達の行動に鞠川先生と実際に行っているスバルが首を傾げている。
その理由を冴子が答える前になのはが答えていた。
「出来ればそうしたいところだけど・・・・・今のような密閉空間での戦いは、進みたい方向の敵を相手しちゃうとそれだけで足止めされちゃうからね。それに足止めされている間でも動いている『敵』が後ろからも近づいてきて挟み込まれちゃったら流石に毒島さんや刹那君達でも辛いよ」
「は、はぁ？」
「へぇ～凄いのね」
ほぉ、高町はなかなかよい観察力を持っているな
鞠川達が納得したように頷く中で、冴子は、なのはの観察力に感心していた。
なぜなら冴子が言いたかったことをこんな惨劇の中で冷静に見いだして、そのまま言い表してくれたからである。
「ああ、そうだ。それに腕力が異常なまでに強い。掴まったら逃げるのは難しい」
冴子は、なのはの言葉を肯定するように補足と付け加えた。
「え～ひゃん！！」

丁度、『奴ら』の包囲網を掻い潜った時であった。

鞠川先生がコケた。

「や～ん、何なのよ！？」

「・・・・・鞠川先生、その格好じゃ」

「うん、走りづらいね」

ティアナとなのはが鞠川先生がコケた理由をすぐに言い当てる。

鞠川先生の服装は、上は白のブラウス、下は膝下まである黒いタイトスカートである。

「まったくだ。走るには、向かないスタイルだな」

冴子は、コケた鞠川先生に近づくとタイトスカートを裂く。

なのは達は、何も言わなかったが、スバルだけ気まずいような顔をしていた。

「あぁあ！！これプラダなのに」

「・・・・・ブランド物と命どっちが大事だ？」

鞠川先生の小さな悲鳴に冴子は、呆れたように聞く。

「両方！！」

「・・・・高町君やセイエイ君達は、どうなのだ？」

鞠川先生の解答を無視するようになのはや刹那達に問いかける。

その結果は・・・・・

「そりゃ・・・・・・」

「・・・・・」

「うん」

「「「「「命」」」」」

全員、一緒の解答が寄せられた。

その解答群に鞠川先生はというと・・・・・

「グスン・・・・・どうせ欲深いですよ」

少し拗ねてしまう。

「・・・・とにかく、急ぐぞ。このまま遭遇戦を繰り返してもこっちの体力が・・・・・」

刹那が急に言葉を切ると表情を変えないまま、廊下の先を見つめる。

「刹那、どうしたんだい？」

「・・・声・・・いや、それよりも軽い音がする」

「えっ？」

刹那の言葉に全員が耳を澄ますと・・・・・

・・・ン、パン、パン！

確かに何かを撃ち出すような音がする。

「これって！？」
「職員室の方だな」

Ｓｉｄｅ　孝

孝達は、二階まで降りてきたところで冴子達と同じ音を聞いていた。

「孝、この音って？」
「銃声か？・・・・・職員室のほうだよな」

Ｓｉｄｅ　沙耶

沙耶達は、なんとか職員室前まで逃げてこられたものの・・・・・
すぐ後ろには、ついてきた『奴ら』が大量にいた。

職員室前で『奴ら』を応戦するシンヤとコータ。

次々と『奴ら』を倒していくがその後から『奴ら』が出現する。

「これじゃ、特性なんて調べようがないじゃない！！」
沙耶は、今おかれた状況がじり貧である事にイラつき、叫んでいた。

「こんな状況じゃ無理だよ、高城さん！！」
「そうですよ！！」
「それにすぐに調べる必要もないしな」
「高城さん達も戦ってください！！」

ジリジリと下がりながら沙耶達は、互いに意見をかわす。

「何で私が！！」

デブヲタが！！私に命令する気！？

沙耶は、一時の感情でコータに怒鳴り返した。

コータは、すぐに理由を言う。

「マガジンがもうすぐ切れます！！」

「だったらすぐに詰め・・・・」

「高城さん！危ない！！」

えっ？

コータに反論しようとした沙耶がフェイトの声に振り返ったその先には、『奴ら』と化した教師が血まみれのまま襲いかかろうとしていた。

いつも柄が悪い漢どもに囲まれている沙耶であってもこれには悲鳴をあげた・・・・・

「いぃきゃぁあああ」

尻餅をつき、アタフタと後ろに下がる沙耶。

フェイト達に助けを求めようとするが・・・・・フェイトとエリオもシンヤとコータが対峙している方向とは違う方から来た『奴ら』襲われかかっている。

「高城さん！！」
「フェイト！！」
すぐにコータとシンヤは、銃口を向けるが・・・・・
「！！マガジンが！！」
「チィ！！」
コータの方は、弾切れで、シンヤは撃つのが間に合わないと判断したらしくモデルガンを捨てフェイトを襲おうとしている『奴ら』に向かっていく。

Ｓｉｄｅ　コータ

「はぁ！！」
シンヤがフェイトに襲いかかろうとしていた『奴ら』の体に蹴りを入れ、吹っ飛ばして引き離す。
「無事か！？」
「う・・・・・！！シンヤ！！」
「！？ウォ！」
フェイトの声にシンヤの後ろから襲いかかろうとした『奴ら』を避けるが・・・・・バランスを崩し、倒れる。
「！！シンヤさん！！」
「クッ！！」

ジリジリと追い詰めれながらもエリオが叫ぶ。

コータは、床に転がっていたシンヤのモデルガンを手に持った。

・・・・・えっ？

モデルガンを手に持ったコータは、違和感を覚えた。

何故ならコータの手に収まったモデルガンは、明らかにプラスチックの重さではなく本物の拳銃の重さの物であったからだ。

「いっ、いや！！くるな！！くぬなぁあああ！！」

深く考える前に沙耶が棚にあったトロフィーを滅茶苦茶に『奴』へと投げつけ、そして工作室から持ってきた工具の１つ、電動ドリルで『奴』の頭を潰しにかかっている光景がコータの目に写る。

「高城さん！！」

平野は大慌てでモデルガンを構え、まず高城を襲う『奴』を狙い、引き金を絞る。

するとモデルガンの方からリボルバーの回転弾層が機構によって回転するような音がして・・・・・銃口から『光の弾』が発射された。

「えっ！？」

モデルガンからの反動と発射された『光の弾』にコータは驚く。

弾は、確かに沙耶を襲っていた『奴』の頭をぶち抜いたものの、コ

ータは、自分が撃ったモデルガン・・・・・を見つめた。

・・・・・なんなんだコレ？

Ｓｉｄｅ　孝

先程挙がった悲鳴に足を早めた孝と麗。

と職員室前の曲がり角で孝達は、校医の鞠川先生を連れた集団と出くわした。

木刀を持った女子生徒は、家の学校の者であるようだが、残りのメンツは、この地域では見かけない制服を着ていた。

言葉を交わす間もなく彼らは、職員室の方を見て、コータ達の危機に気づく。

木刀を持った女子生徒と二本の木刀を持った見知らね男が素早く孝達に目で合図する。

殺るぞ

それと同時に４人は、走り出した。

「正面の三体は、私とセイエイ君で殺る。君達は、左右を！！」

「わかりました、麗！！」

「左は、任せて！！」

三方に別れ、孝達は『奴ら』を倒しにかかる。

「はぁぁ！！」

左に行った麗が『奴ら』の一体の頭にモップを突き刺す。

そして孝も助走を着けて飛び、『奴ら』の頭に・・・・

「うらぁぁぁぁぁ！！」

バッドを振り降ろす。

Ｓｉｄｅ刹那

彼らよりも先行した刹那は、左足を軸に回転した勢いを利用して長い木刀で一体の頭を潰した。

続いて・・・・・

「受けとれ！！」

短い方の木刀をシンヤへと投擲。

その声に反応したのだろうか、シンヤは片手でそれを掴むとそのまま自分を襲おうとしていた『奴』の頭に突き刺す。

刹那も投擲してから動きを止めずにエリオの方に向かい、エリオ達を襲おうとしていた『奴』の頭を潰した。

「！！刹那さん」

「無事か？」

「はい！」

エリオからの返事に少しだけ安堵した刹那は、辺りを見渡す。

自分と同じように『奴ら』を倒し終えた冴子と先程合流した生徒２人、それに自分に寄りかかりながら活動を停止した『奴』を血に汚れながらシンヤがどかしている。

「高城さん！！」

「・・・・・宮もと」

モップを持った女子生徒が電動ドリルで倒したらしい血塗れの女子生徒に駆け寄った。

刹那は、木刀についた血を払いつつもエクシアに問う。

エクシア、周辺情報を

熱源方式による探査・・・・・を完了、入るまでに襲われそうな距離にはいません

・・・・・わかった

刹那がエクシアとの念話通信を終えると後続のなのは達と鞠川先生が到着した。

「なのは、ユーノ。無事だったのね」

「うん」

「フェイトちゃん達も無事でよかったよ」

「よっと、無事ってよりも・・・・・流石にヤになる。これは」

刹那から借りた木刀から血を払うシンヤは、顔等についた返り血を制服の裾で乱雑に拭い、小太り気味の青年に歩み寄る。

Ｓｉｄｅ　シンヤ

シンヤは、手に持ったストレイドの片割れに目を落とすコータの目の前まで歩み寄るとコータが握っていれストレイドの片割れをに手をかけた。

「！！・・・・・し、シンヤさん」
「無事の・・・・・ようだな」
シンヤの手でコータは顔をあげた。

「シンヤさん、この銃って・・・・・」
やっぱり、気付くよな
咄嗟な事とはいえ・・・・・

自分が喰われかけた際、シンヤは、視界の片隅でコータがストレイドを握ったの見ていた。

自分よりも沙耶が危険だとと見たコータが沙耶を襲っていた『奴』にストレイドを向けたことも・・・・・

咄嗟にストレイドの機能の一部を解放するように念話で指示をとばし、コータに撃たせた。

コータの腕もあってからかその光弾は沙耶を襲おうとしていた『奴』の頭を撃ち抜いた。

その後の反応からコータは、自分が握っていた『物』かモデルガンでない事に『気づいている』。

「あの・・・・・」

さらに口にしようとするコータ。

シンヤは、口を彼の耳元に近づけ、囁いた。

「・・・・・今は、言えないが落ち着いたら詳しく話す・・・・・分かるだろ、今の状況から同じ人間が『敵』になったら・・・・・な」

「！！」

コータから息を飲む音がした。

そして、少し緊張した面持ちで頷いた。

よしと・・・・・やっぱコイツ、どっかで訓練受けてるな

シンヤは、コータが頷いたのを確認すると返されたストレイドをズボンのポケットに入れ込むと刹那達の方へ向き直った。

「鞠川校医は知っているな。私は、3年の毒島冴子だ。よろしく」

「去年、全国大会で優勝された毒島先輩ですよね？私、槍術部（そうじゅつぶ）の宮本麗です」

「2年の小室孝です・・・・・ところでそっちの方々は？」

孝と名のった男子学生が刹那やシンヤ達の方を見て、冴子と名のる女子生徒に問いかけていた。

「ん、彼らは、学外から逃げてきた別の学校の生徒だ」
「別の学校？・・・・・あっ」
「孝、さっき見た子ってあの小手を着けている子じゃ？」
「そうだ、さっき校庭で派手にやりあってた・・・・」

その呟きにスバルが反応した。

「それ私です・・・・・女の子を助けようとしたんですが間に合わずに・・・・・あっ、私、スバルって言います」「ティアナ・ランスターです」
「僕は、ユーノ・スクライア」
「ユーノ君達と同じ3年の高町なのはです」
「・・・・・刹那だ」

Ｓｉｄｅ　孝

「・・・・・よ、よろしく」

なのは達の名を聞いた孝は、こんな状況で、しかも彼女らの服に多かれ少なかれ血の汚れているところを見ると少なくとも数十体位は相手にして来た中でも普通に自己紹介してきた事に少し戸惑う。

と平野に何か話しかけていた黒髪の人が孝の肩を叩く。

「まぁ、女性は度胸勝負なところが多いからな・・・・・男性よりも図太いところがあるんじゃないか？・・・・・あっ、俺はシンヤだ。そんで金髪のがフェイト、赤髪の子がエリオ、彼に背負われているのがキャロだ。まぁ、よろしく頼む」
「は、はぁ・・・・・」

アンタも図太過ぎるだろ・・・・・・

少し孝は、戸惑う。

と・・・・・・

「・・・・・なにさみんなデレデレして」

沙耶がふらつきながらも立ち上がった。

その目尻には涙が貯まっている。

「おい、高城なに言って？」

孝が沙耶の言葉に声をかけたが・・・・・

それを睨み付け叫ぶように言葉を放った。

「バカにしないでよ！！アタシは天才なんだから！！」

やはり何かおかしい？・・・・・まさか、錯乱してるのか？

孝がそれを止めに入る前になのはが歩み寄っていた。

「その気になれば誰にも負け・・・・・何よアンタ、部外者のクセに！！」

「部外者でも関係者でも変わらないよ・・・・・よく耐えたね」

なのはの表情は、静かなものだ。

「耐えたってな・・・・・」
「もういいんだよ。今だけは・・・・・・・・・・」
なのはは、優しく沙耶を抱き締めた。
その瞬間・・・・・
「うううっ・・・・・ぁあぁぁあうわぁぁぁぁ・・・・・ん」
沙耶はすべてを吐き出すように泣き出した。
ここにいるすべての人間の気持ちを体現しているかのように・・・・・
廊下の窓から差し込む日の光はいつの間にか赤く染まっていた。
???
マダ・・・・・マダ、『ミツカラ』ナイ
ワタシノ・・・・・ワタシ『ダケノ』・・・・・!!!!!!
怒りの叫びに連動するかのように暗闇に稲光が舞う。

3　弔う者と集まる者達（後書き）

虚空「・・・・・・」←黒焦げ中

孝「作者さん・・・・・・」

シンヤ「まぁ、仕方がないさ・・・・・・それより・・・・・・」

シンヤ達の後ろには、山積みになった企画書の山がある。

シンヤ「・・・・・・」

コータ「な、なんですこの山？」

アレン「作者の頭の中にある企画書ですよ」

孝「あんた、誰！？」

シンヤ「よぉ、アレン。そっちはいいのか？」

アレン「ええ、あと少しで章が終わりますから・・・・・・あっ、俺の名はアレン・シュラウド、よろしく」

孝「誰なんです？」

シンヤ「・・・・・・例のエブリスタでの小説主人公だ」

孝「えっ！」

アルト「俺を忘れちゃ困る！！」

コータ「今度は？」

シンヤ「作者が初めて作ったオリキャラでエブリスタの第一作小説主人公だ」

孝、コータ（作者さん、浮気しすぎだろ）

シンヤ「まぁ、仕方ないさ・・・・・・作者は、面白いと感じたら頭の中に物語を作っちまう野郎さ・・・・・・それがこの山だ」

孝「・・・・・・（汗）」

シンヤ「さて・・・・・・今、企画してるのは・・・・・・ＩＳ？ハー

レム状態を分割するためにか？」

なのは「ふぅ～ん、作者さんは浮気者なんだ・・・・・だったら頭冷やそうか」

虚空「ギャアアアア」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3570n/

学園黙示録 集いし異世界の旅人達

2010年10月11日10時38分発行